第8回 銀華文学賞発表

銀華文学賞もおかげさまで八回を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、ブラジル、フランスなど海外から、四一一篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・都築隆広・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回もさらに歴史小説に優秀な作品が目立ち、昨年新設した歴史小説賞を継続させていただきました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は四五号以降に順次掲載させていただく予定です。御期待ください。

第八回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一二年一月二十八日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第九回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

※選考に当たり、小林広一氏、早川ゆい氏、中野睦夫氏に御協力をいただきました。

銀華文学賞

当選

「転ぶ女」　冴場　渉（千葉県旭市）

「デスペラード」　牧港誠之（神奈川県横浜市）

河林満賞

「一初（いちはつ）」　皆笹麻希江（大阪府大阪市）

歴史小説賞最優秀賞

「淡雪―実朝の死―」　北風嘉己（北海道札幌市）

優秀賞

「埋（うず）み火」　土岐田耕（大阪府大阪市）

「言葉は武器なり」　六藍光洋（兵庫県神戸市）

「蓋」　丹羽加奈子（愛知県名古屋市）

「片影（へんえい）」　星野　透（埼玉県所沢市）

「仙薬」　上野雄三（福岡県中間市）

「蕎麦の花」　神通明美（富山県富山市）

奨励賞

「一期一会」　寺田　保（北海道函館市）

「萩の器」　北野滋子（大阪府大阪市）

「ポスト」　坂口保典（長野県小諸市）

「宅老所『なごみの園』」　飯島もとめ（長野県長野市）

「青春の守破離」　小林良之（兵庫県三田市）

「リバース」　宮澤えふ（兵庫県赤穂市）

「悪霊」　朝永　潔（大阪府大阪市）

「明白な運命」　二宮英郷（東京都渋谷区）

「声が響く」　岡野弘樹（兵庫県加古川市）

「藍色のキャンバス」　宮下浩子（東京都世田谷区）

「闇を抱きしめて」　国方　勲（大阪府枚方市）

「振り込み」　荒井隆志（東京都練馬区）

「ヒヤリハット」　小野友貴枝（神奈川県秦野市）

「妹、幸」　北上　実（新潟県新潟市）

「ラッキー」　平沢裕子（岩手県花巻市）

歴史小説奨励賞

「舞草刀（もぐさとう）」　久保協一（岩手県盛岡市）

「小倉百人一首実朝歌余談」　尾崎克之（千葉県松戸市）

「北の独裁者の死」　迎来太郎（東京都稲城市）

「異聞保元の乱」　小笠原新（山形県酒田市）

男の華と渇き

八覚　正大

この賞も第八回目を迎えることになった。そんなにやってきたのかなと思うが……たしかに選評も八回目になる。うれしいことに質が向上したことは確実に言える。人間が密に終結することの結果だろう。その中から押し上げられるようにして秀作が立ち上がるものだ。

今回、目に吸いついてきた原稿があった。それは牧港誠之の「デスペラード」である。無法者、命知らず、ならず者など多少のニュアンスをもってその英語のタイトルを訳せよう。また映画、音楽にも同様のタイトルはある。が、作者が主人公に与えた目線は一読すれば自ずとわかるであろう。

俗に言う港湾労働者の内部が描かれるが、その現場の言葉遣いが実にうまく使われていて、その実態を知らないものも納得した気持ちになる。その場は流れてきた者たちのある種「吹きだまり」なのだが、その中に高校時代、ラグビーをやり県の決勝にまで進んだ過去をもつ佐々木亨がいる。語り手のおれは佐々木のことがどこか気になり、仲間として付き合っていく。佐々木は元警察官だったようだ。それが過去に事件を起こし身を落として港湾労働者として働いていたのだ……。

とにかく文が生きている。労働者仲間の現場の葛藤あり、人間関係あり、飲み屋あり（そこにいる女への佐々木の思いも描かれ）……ラストは、過去の事件で警察に追われていた佐々木が、かつてのラグビー選手の花型を彷彿とさせるステップを踏んで刑事たちをかわすシーンだ……結局捕まってしまう。しかしその一瞬の栄光の再現は眩しいまでに耀きをもって「おれたち」には見えたのだ。

ハードボイルドという言葉やヘミングウェイを持ち出すまでもなく、ここには男の人生の一瞬の華とは何なのか――が見事に描かれている。この作者は、以前にも「沖縄海洋もの」とでもいえそうな優れた描写による秀作を何作も出してはいる。しかし、今回そこから新たなる描き方で華麗なステップを踏み直した感がある。以前から作家の自覚はあったと思う。しかし今回あらためて、この作者を「作家」と呼び直したい。純文学に踏みとどまったまま、面白い作品群をさらに創り出してほしいものだ。

そしてもう一人、「作家」と呼ぶにふさわしい作者を見出す。冴場渉である。今回の受賞作は「転ぶ女」だ。過去に愛した女は、今は落ちぶれて病になり薬漬けの日々を送

佳作

「津波」　成瀬秋彦（東京都練馬区）
「思えばいと疾し」　形山謙一（山形県山形市）
「ミュンヘンに死す」　南城堯也（埼玉県日高市）
「イエスの島で」　波佐間義之（福岡県中間市）
「千花の壁」　来の宮あんず（東京都江東区）
「耳たぶ」　吉野光久（神奈川県横浜市）
「赤い月夜に」　佐々木国広（滋賀県東近江市）
「転校生」　室町　眞（東京都杉並区）
「若いメル友」　浦上京子（大阪府寝屋川市）
「三代目のカフェ」奥はじめ（Courbevoie FRANCE）
「誰かが静かにやってくる」　山田吉生（栃木県宇都宮市）
「三日間」　耕田みずき（北海道札幌市）
「笛の誼」　三山晃生（埼玉県深谷市）
「桜」　小林理樹（東京都小金井市）
「三凶神」　秦純四郎（北海道小樽市）
「微笑み返し」　折口　真（埼玉県所沢市）
「夢想の雲」　大和川義之（大阪府堺市）

「鮎返しの滝」　中川ガバチャ（和歌山県和歌山市）
「原っぱの幽霊」　小笠原幹夫（埼玉県狭山市）
「心残り」　富田鈴子（愛知県名古屋市）
「鮎」　藤沢辰雄（奈良県大和郡）
「聖夜に舞う雪」　松尾　修（長野県上伊那郡）
「晩秋の稜線」　宇和静樹（大阪府堺市）
「駅前茶屋日録」　久間一秋（福岡県小郡市）
「ペーパー・フラワーズ」　潤野恵子（東京都江戸川区）
「波の裏」　成瀬健太郎（神奈川県藤沢市）
「喫水線」　田浦夏美（東京都練馬区）

歴史小説賞佳作

「三増峠」　松田征士（東京都町田市）
「遠い灯」　岡本　晶（京都府宇治市）
「幻の松尾城」　吉田満春（千葉県山武市）
「七良屋の達磨」　碧居泰守（千葉県松戸市）
「じろう」　木山省二（東京都板橋区）
「残照」　上田英博（高知県香南市）

っている。その女を再訪する男のまなざしは、取り切れない責任を未だ抱えつつ、痛ましくやさしく切ない。その様が見事に描かれている。

実は彼は「哀愁のティラノ」（ティラノはティラノザウルスとのこと※編集部注／この作品は「決別の川」と改題して文芸思潮26号に掲載）という作品を何年前だろうか、書いたことがある。主人公の男から見た過去の女・家族への視線が、人生の経験を経た男の自負と切ない痛み・疲弊を伴った見事な表現として表わされていたと思う。そのときから注目はしてきたのだが、少し生々しすぎる「骨肉の町」などを経て、今回、ここまで一人の女との関わりをまさぐった男を描いている。「デスペラード」が、男の過去の華の再現という「表」とするなら、この「転ぶ女」は、かつて快楽を共有しあった仲間への鎮魂という「裏」の顔である。その鎮魂は惨めな姿をさらす相手へのまなざしだ。男が逃げたようなラストだが、しかし男は逃げてはいない。その痛ましさを自らの内に内在化させ背負っていくのだ。《哀しくはなかった。ただ、渇いた気分がした》という一行は、この作品の掉尾を飾るにふさわしい。

今は亡き、小生の文学の戦友・河林満の傑作に「渇水」という小説があった。内容をここで書くつもりはないが、男の哀切さは詰まるところ「渇き」に行きつくのかもしれない。

歴史小説部門で良かったのは、「淡雪―実朝の死―」（北風嘉己）と「小倉百人一首実朝歌余談」（尾崎克之）の二作である。両者とも実朝を扱っている。前者はわかりやすく読みやすい。ただラストが少し弱い気がした。後者は実朝暗殺を扱った少しミステリアスなものでディテールと歌の多用が読ませた。ただ、その真実性はなかなか検証しがたく評価は分かれるかもしれない。『金槐和歌集』を一応目を通して選考に臨んだが、情景を詠む歌が多い中で心の苦しみや個の絶唱のようなものは、古にあって近代の自我の芽生えを先取りしたようでやはり驚きを禁じ得ない。

「舞草刀」（久保協一）は迫力は感じたのだが、忍びの者の活躍への焦点の当て方が唐突だったりわかりにくかったりした。忍びの者を用いた者の意図か、用いられた者の生きざまかのどちらかに焦点を絞って描いてもらいたかった。以下は感想程度だが、印象に残った作品に触れてみたい。

「蓋」（丹羽加奈子）　タイで事故に遭い頭蓋の一部を失った男の話。発想が面白く、ふた、ふた、ふたというリフレインが効いている。過去に三人の子を育て苦労した再婚の女房が、しっかりした蓋となったという感覚は、けっこうピタッと嵌った感じがした。

「愛華」（丸山史）　文はなかなか良く沖縄の女性のおおらかな姿が、愛華と言う妊娠した高校生の娘になかなかよく表されていたと思われる。優秀賞くらいでも良いと思えたのだが、他の選考委員の支持はあまり得られなかった。沖縄が生き続ける意味――が、今一つ鮮明に見えなかったのかもしれない。力のある作者なので今回は選者たちが辛かったと思われる。

選評

「ペーパー・フラワーズ」（潤野恵子）　神経を病み、後年認知症の入った母親を介護する娘と父親。ラスト近くの、母親がトイレの中に閉じこもり紙の花を溢れるほどに作ったシーンは圧巻。

「ポスト」（坂口保典）　現代の集合住宅事情が実によく描かれている。筆者も団地住まいであり、理事も経験しているので、このようなエキセントリックな事態にはリアリティが感じられる。内容の点では優秀賞と思われる。文はもう少し推敲されて描写を鍛えてほしい。

「宅老所『なごみの園』」（飯島もとめ）　一人ひとりの登場人物への暖かいまなざしが、なかなか良い。読んでいて気持ちが和んでくる。ただ、どこかエッセイ的ではあるので小説としての評価は今一つだった。

「仙薬」（上野雄三）　発想や導入はなかなかだし面白くは読めたのだが、やはりあり得ない？　と思わせる点、饒舌すぎる点がやや興冷めだった。

「闇を抱きしめて」（国方勲）　人間的な美術の教師の生き方を、若い教師の視点から見た小説。少し前の時代の教員と学校制度はよく描かれているが、この美術教師の闇、芸術性の部分が今一つ伝わってこなかったのが残念。

「言葉は武器なり」（六藍光洋）　パリ留学中に出会ったクメール・ルージュ親派の学生と主人公との交流。年月が経ち、彼が殺されたことをカンボジアの現地に入って知る……話題的にはなかなかだが、その学生との出会いから主人公自身がどう変わったのか――そこが描かれていないので、

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」
文芸思潮

どこか他人事の域を出ないような印象になってしまったのが残念。

「明白な運命」（二宮英郷）　エネルギッシュな文体と性描写を得意とする作者。銀華文学賞の常連中の常連。スケールの大きさや、性のおおらかさはこの作者ならではのもの。しかし今回は、ちょっと大きすぎる時代の内容をやや粗っぽく捉えた感が……。

「蕎麦の花」（神通明美）　事故で怪我をした男性が、過去に情を通じた女性から励まされ回復していく話。俳句もなかなかとは思うが、少し男性の独りよがりな感も。

「藍色のキャンバス」（宮下浩子）公園で出会った六十代の男の絵を売ってあげる九十歳の老女の思い。ちょっと着想は面白かったが、絵の描写などもっとほしい。

「振り込み」（荒井隆志）　売り物の古札を取り替えて借金を返した男。しかしその行為を見られ強請られる……。設定、発想などなかなか読ませた。しかし、ラストお金を払ってしまうところが、何か尻切れトンボと言う感じ。

「ラッキー」（平沢裕子）　息子を自死させてしまった母親のそれからの人生。施設で飼われていた犬に息子を投影する情の部分はなかなかだが、息子が自死するところは唐突。病死とか事故死の方が……。

「一期一会」（寺田保）　召集された男性が戦場での負傷者薬殺の事実を知る……。内容は重く、迫力も感じられるが、どこか幻想と事実が混在してしまっているようで、読んでいると何かわからなくなってしまう。一度会っただけの女性が、さらに出てきたり、幻想なのか……。

「津波」（成瀬秋彦）　中年デザイナーの若い同僚への嫉妬心はよく描かれている。そのような個人的な感情体験と、大地震・津波との関係がもう少しこなれないと――。

「赤い月夜に」（佐々木国広）　幼い娘にいたずらをした労務者をつきとめ撲殺してしまう男の話。恨みの成就までのミステリアスな部分は読ませるが、こっそり打ち明けられても読者はどこか戸惑ってしまう。

「波の裏」（成瀬健太郎）　母親の回想と老いらくの恋情。文章がしっとりとしていて、情感を感じる。波の裏という表現は納得。

「千花の壁」（来の宮あんず）　姉コンプレックスの主人公の偏執はけっこうよく描かれているし、うまいと思う。しかし世界がどこか怨念的で狭い。それが解かれ拓けていくような部分を描いたら面白いと感じた。

「声が響く」（岡野弘樹）　人格の乖離した少女の姿と母親、それからお祖母ちゃんとの出会い。視点の問題を作者は狙ったのかもしれないが、残念ながらわかりにくかった。

「晩秋の稜線」（宇和静樹）　命の恩人を死刑執行する警吏の話。内容は重く苦しいところはあるのだが、死刑執行官の話はすでに世に出ている。なにかさらにオリジナルな感覚がほしかった。

「喫水線」（田浦夏美）　夫と叔母との三人生活に嫌気がさした主人公の女性の話。シチュエーションと叔母コンプレックスの男性は描けているがラストが平凡。タイトルに溺れた？　感じ。

「天使の仮面」（鵜飼勝）　香港に逃げ、客引きをするようになった男の話。親切な男の仮面はわかるしラストも良いが、テーマがわかりにくい。

「文が痛い」（鈴木英夫）　これも常連の作者。発想はわからないでもないが、メールのやり取りの域を抜けてはいず、人間の情の部分の絡みが感じられない。メールの持つ限界をえぐり出すとか、実際に出会って意外な出来事が起こるとか……もっと展開を期待する。

「一初」（皆笹麻希江）　浮気の話。飄々としたところが読ませる。かなり力のある作者だが、うまさが先に立って、考えさせるようなところは感じられなかった。

「イエスの島で」（波佐間義之）　カネミ油の事件を追ったテーマは重いものだが、一人の妊婦に背負わせてしまったのは重すぎて暗く、読んでいて切ない。岩に昇華させてしまうのは逆に文学としては物足りなかった。

文学者としての目

小沢美智恵

今年の候補作には力作が多かった。応募資格四十五歳以上。さすが長年書いている作者たちだけあって、なかなかの技倆である。

しかし、巧い、面白いとは感じても、「受賞作」にふさわしいかとなると今ひとつ決め手がなくて、今年は該当作は出ないかも知れないという思いで選考会に臨んだ。

他の選考委員も似たような気持ちだったらしく、どれを受賞作にするかで長時間話し合いが続いた。

たとえば、土岐田耕「埋み火」は、老齢の男性と若い女性の心の駆け引きが巧みに描かれ、なかなかこうは書けないと感心させられる小説だが、読んでいくうちに男性主人公の自慢話を聞かされているような気がして鼻白んでしまう。

上野雄三「仙薬」は、不老不死の薬という非現実的な話を巧みな語り口で読ませて、エンターテインメントとしては優れた作品になっているものの、最後の締めくくり方がありがちで、せっかく奇想天外な物語を仕立てたのだか

ら、もっと読者を驚かせるような終わり方はなかったかという欲が残る。

丹羽加奈子「蓋」は、事故で頭蓋骨に穴が空いた男が過去を思い出す話で、穴から様々な記憶が出入りするさまをリズミカルに描くテンポのよさに魅力があるが、読後その描き方しか印象に残らないうらみがある。

星野透「片影」は、昔交際したことのある女性の姿がくっきり浮かび上がる味のある作品だが、本題に入る前が長すぎ、随筆風すぎる嫌いがあった。

また、北風嘉己「淡雪―実朝の死―」や尾崎克之「小倉百人一首実朝余談」、久保協一「舞草刀」など歴史に材を取った作品は、資料をよく調べていてそれぞれ読ませるが、「歴史小説」という型にはまりすぎていはしまいか。

そんななかで受賞作として浮上してきたのが、冴場渉「転ぶ女」と牧港誠之「デスペラード」だった。

「転ぶ女」は、還暦に近い男性の語り手が、かつて関係のあった女性・美雪から病気療養をしているという電話を受け、家に見舞いに行ってずるずる交流を続けてしまう話だが、内部に過剰すぎる「女」を抱えた美雪という女性に際だったリアリティがある。夫がいながら他の男性ときわどい関係を持って恥じない彼女と語り手の関係はおぞましいといっていい様相を呈するし、内容に救いもないのだが、身勝手な女の存在感が確かに残り、そこに固有の人生があることを感じさせる。

この美雪のような生き方は、良識的な世界からは負の部分として排除される類のものだろう。一般社会で生活している人々は、その排除された部分を黙殺、あるいは見まいとする。しかし実際にわたしたちの生きる世界というのは、排除されたうとましいものをも包みこんだ、より大きな象徴的宇宙として把握されなければならないものである。文学の役割のひとつが、そういう排除された部分を表現することであるなら、人間の負の面をしっかり見据えた「転ぶ女」は、文学たりえているといえるのではないか。

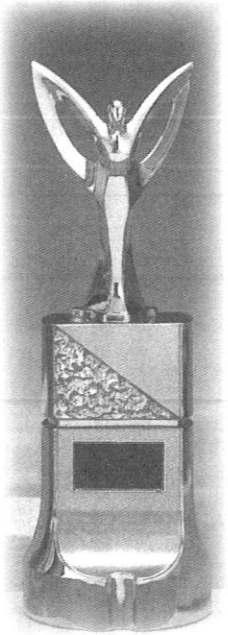
そのような負の部分を背負った人物を描いているという点では、「デスペラード」も同じで、主人公の仕事仲間・佐々木が、物語が進むにつれ警察に追われるような犯罪型の人物だということが明らかになってくる。この作品は主人公たちの仕事である港湾作業の実際を詳細に描いてもおり、その筆力に安定感もある。

授賞にあたっては、この二作者が当文学賞の常連の入賞者であり、選考委員が彼らの作品を複数読んできたということもプラスに働いた。「この二人の作品には作家性がある」と評した委員がいたが、一連の作品を読んで、わたしもその評言が本質をついていると感じた。

小説家は小説を書いているときだけ小説家であるのではないだろう。映画を見ているときでも、スーパーで買い物

しているときでも、恋愛しているときでも、常に文学的に物事をとらえる訓練を無意識のうちにしている。文学者として実人生にたずさわる、その文学者としての目が、二作品には色濃く反映している気がしたのである。

最後になったが、河林満賞には、皆笹麻希江「一初」が選ばれた。六十七歳になるフォトスタジオの店主が、パートの面接に来た綾乃という女性に一目惚れして囲う話である。妻と娘に隠れてうまいことをしているはずの店主・猛男が、いつのまにか女たちにしてやられている感じが、関西弁をうまく使って軽妙に語られている。女の強さを標榜してまことにうまくできた小説だが、妾宅の庭に咲く花の名前「一初」をタイトルにしたところが、わたしには惜しく思われた。作者は使者という花言葉を使って作品とタイトルを結びつけ、そこに意味を持たせようとしたのかも知れないが、作品の自然の流れに従ってあっさり終わらせ、タイトルも直球勝負でつけたほうがずっとよかったのではないか。



圧倒的な筆力

大高雅博

今回は大地震があり、早くも、それを取り込んだ作品が最終選考にも何作か残ったということが特筆される。ただ、震災に遭われた方が、それを小説にするには余りにも時間がないと思われ、その周辺か、外側の人の手によるものと考えられる。かなり微妙な問題があり、描き方は難しい。震災を自分が受けたのと同じような真摯な気持ちで書かれているのがわかる作品もあるが、今回は上位には推せなかった。震災を扱うには、より繊細な、別のやり方が必要なのだろう。

また今回、かなりの作品でありながら、この人の力量であれば、これくらいは当然であり、前よりは良くないという理由で、上位に上がれなかったものもある。八回目ともなると色々な採点要素が入ってくる。

さて、今回の当選作であるが、牧港誠之「デスペラード」冴場渉「転ぶ女」に決定した。両者とも前々から力量は評価されていた。牧港氏は沖縄の海を題材とした存在感のあ

る作品があり、筆力は認められていた。最近は都会に題材を取ったものに変わっているが、前作は主要人物設定に無理があるようだった。今回は纏まりが見られる。ただ、結末については、賛否が分かれた。人物達には存在感はあるのだが、さあ、それでというようなことがあるのも事実である。

冴場氏は、昨年の優秀賞「骨肉の町」の印象が強い。「骨肉の町」は兄弟の確執の話であったが、今回は男と女の話であり、良くも悪くも病気であるその女性の存在感が凄い。前作とは全く違ったシチュエーションで、選考会当日まで、「骨肉の町」の作者とは気が付かなかった。こちらも結末がどうかという気はしないでもないが、両者とも圧倒的な筆力があったように思う。

今回時代物で選ばれたうち二作が源実朝に関するものであった。北風嘉己「淡雪―実朝の死―」は一般的イメージとは違う名君としての実朝であり、尾崎克之「小倉百人一首実朝歌余談」は詩歌の方に重きがある。実際、詩歌の解釈というような所に進むと、よくわからない部分がでてきて、評価が難しくなる。下読みの段階で、高句麗の話があり時代物としては良いと思ったが、最終には残れなかった。時代物の範囲については検討の余地があるかもしれない。

優秀賞では上野雄三「仙薬」が高得点を集めた。長寿薬の話で、中々巧みであるが、結末がもうひとひねり欲しかった。神通明美「蕎麦の花」は交通事故で身体が不自由になった男の復活の話である。昔、多少の心の動きがあった年齢の離れた若い女性が現れ、希望を得る。その昔の出来事はもっと、軽い方が普通に思えるのだが、読後感は良かったと思う。

奨励賞の国方勲「闇を抱きしめて」は進学校内部での、先生達の確執であり、中では美術教師の描き方が良かった。ある時代を写し取っている感じがして興味深く読ませていただいた。ただ、興味ある素材だけにもう少し整理した方がよいかも知れない。

朝永潔「悪霊」は、学園もの、いじめを題材としたホラー小説であるが、最初から最後まで安定した緊張感があり、面白かった。いじめられている方が逆転するのはなかなかのアイデアだ。もっと、長い方が良いのではとの声もあった。さらに先まで進めてもよいかも知れない。

宮下浩子「藍色のキャンバス」は、九十歳の女性がホームレスのような画家の絵を売り歩くというような話で、印象的であった。

宮澤えふ「リバース」は前世占いのようなものを使いながらちょっと、しゃれた物語にしている。

この他にも、クメール・ルージュ、カネミ油症、死刑執行、マンション問題と、書かなければならない題材を元にしてのものが目立つ。中にはうまくいっているものもあり、

または、そこまでいたっていないものもある。どこまでが経験で、資料に基づくものかわからないものもある。要は、どこまで、資料、自分の思いを消化して、小説化するかということになるのであるが、この間の距離感というようなものが、難しい。格闘して下さい。

〝死を想えよ〟は間隙の時代に

都築隆広

上位争いは、「デスペラード」「仙薬」「蓋」「転ぶ女」そこに「片影」「埋み火」が迫った、といったところでありましょうか。

当選作となった「デスペラード」は作中にイーグルスの楽曲だと説明がありますが、三十代男子ならアントニオ・バンデラス主演の銃アクション映画を連想するかも知れません。これが若者向けの雑誌でしたら、「え？　当選作のタイトルが『デスペラード』？」と難色を示しますが、六十七歳の作者が書き、高齢者の投稿によって支えられる銀華文学賞ならユニークだと思い、私も推薦しました。何をしているんだかさっぱりわからない港湾労働者達の仕事も筆力できちんと読ませ、なんといっても、ラストシーンのやりとりが男のロマンでした。ちなみに、「これが男のロマンだったなんて、私は読んでいて思いもよらなかった」とは小沢美智恵選考委員の弁であります。女にはわからない世界なのです。

もう一つの当選作は「転ぶ女」。女のわがままがリアルといいますか、なんともひどい性格で、それに拮抗するぐらい男性の性格も悪い。その一癖も二癖もある人間ドラマが何故だか味わい深く、これもまた読ませます。また優秀賞の「埋み火」や「片影」も同系統の作品だと思いました。恋愛における男の傲慢さや思い込みの強さがよく描かれていて、シリアスなのに滑稽で、しかし技術的には高度でした。ただ、その昔、山田詠美氏が文学界新人賞の選評で候補作に対して再三、こぼしていたように「登場人物達の関係が素敵じゃない」という評が、この三作にも当てはまります。即ち『自分が今、書いている小説の人物達は、他人から見て、素敵な人間関係を築けているのだろうか？』という問題で、文学性とは直接、関わらない部分ですが、文芸誌というステージで小説を書くにはやはり頭を悩ませるべき事柄ではないでしょうか。

続いて、「仙薬」は典型的な魔術的リアリズム小説です。ありそうもない話なのに、物語が巧みでありそうに見える。特に財布を届けたという、ありふれた語り出しが効果的でした。異界へと読者を導くには、ありふれた場所から誘わ

ねばなりません。でも、オチはいまいちでした。最後さえ書き換えられていれば、当選作だったでしょう。

「蓋」は文章がリズミカルですらすら読めます。この小説に登場するタイのシラチャーには私も一ヶ月程、滞在したことがあって、信号もないような最悪の交通事情の場所です。ここなら交通事故も起こります。この作品も幻想的な内容に反し、実話っぽい要素がある点が支持できました。

私のイチオシ作品は上位争いには参加できなかった奨励賞の「一期一会」。東北関東大震災の破壊を直接描くよりも、それを連想させる戦時中を描いた方が今の時代の風潮に合っているのではないかというのが持論ですが、戦争体験者にしか描くことができない、真摯な内容が世代に関係なくストレートに届きます。原稿用紙三三枚とは思えぬ内容で、特に後半に登場するＣＯＯＬな看護婦のキャラクターに惹かれました。その反面、再登場したヒロインが幻想めいているとの批判が選考委員から相次ぎ、確かに細部は矛盾だらけで弁護しきれませんでした。

下読み委員の間で話題沸騰だったのは、姑のような夫の叔母とのバトルを描いた「喫水線」です。ただ、「単なる嫁姑ドラマなのでは？」という五十嵐編集長の鋭いツッコミにぐうの音も出ず、佳作止まりでした。もし、「下読み賞」なる枠がございましたら、橋田壽賀子ドラマの熱心な視聴者でもあるこの私が、個人的に差しあげたいところです。

ところで、今回の選考会で上位が「津波」ネタで占められているようなら反対しようと思ったのですが、他の選考委員の方々も同じ考えだったらしく、「思えばいと疾し」「津波」「転校生」といった「津波」をテーマにした作品はいずれもふるいませんでした。三作とも人間ドラマは上手かったのですが、やはり人命が失われている問題なので、発表時期が早すぎました。人々が破壊を忘れかけ、次の大事件が起こるまでの間隙の時代が、必ず訪れます。そうした平和のなかで、〝死を想えよ〟と諭すように、あの「津波」を思い出し、描いてゆくのが一番でしょう。もし五年後、十年後にこれらの作品が発表されていれば、上位陣を入れ替えさせるぐらいの力を秘めていたと思いました。

積み重ねの輝き

五十嵐　勉

第八回目の銀華文学賞は、全体にレベルが上がった。特に三次予選近辺の層はいい作品がたくさん集まって、どれに涙を飲んでもらうか、予選担当者一同で苦慮した。結局当初の方針通り、数にはこだわらず、あくまで作品の質を重視し、レベルとして高いものはすべて三次予選以上とした。このグループだけでなく、一次通過レベルでもかなりアップしており、それぞれにある程度の普遍的な内質を備えていて、箸にも棒にもかからない未熟な作品はほとんど姿を消した観がある。これらのことは、応募者の力が鍛錬によって上がっていると同時に、力量豊かな書き手が、この賞に眼を向け、応募してくるようになった側面も表しているだろう。経歴を見ると、一流新聞の元デスクとか、有力な賞の最終候補作家とか、華々しいキャリアが目立つ。いきおい三次予選以上は激戦で、百花撩乱の饗宴に、選考委員は候補作の多さを含めて戸惑いかなり迷ったというのが本音である。

しかし全体のレベルは上がったということは実感しても、トップの最優秀賞をどれにするか、銀華文学賞の顔として推せるかという段になると、さらに要求が高くなることも否定し得ない事実である。その点では、今回断然というほど突き抜けたものはなく、何が何でもという意気込みで推薦できる作品はなかった。優秀賞以上はほとんど並んでおり、どれが当選となってもおかしくはなかった。

最優秀賞に輝いた冴場渉氏の「転ぶ女」は、女性のなよやかなよりかかる一面の権化を見事に人格化して、その姿を悲劇にまで追い詰めている。冴場氏は奨励賞や優秀賞に何度もなっている銀華文学賞の常連ではあるが、一貫して負の領域の人間の生き様に光を当てている。その虚無的な陰影は、暗鬱な領域を這い回らざるを得なかった氏の人生の苦渋をそのまま投影している。それがまた独特の灰白色のトーンを奏でて、深い味になっている。その人生体験を経て初めて持つことのできる運命への眼差しは、絶望に裏打ちされた光への信仰である。文学によってしか救われない人間の投げ出された姿がそこにある。これまでで最も結晶度の高い作品は、何度もの挫折を越えての到達感がある。その積み重ねの上の輝きに心から賞賛を贈りたい。

同じく当選作となった「デスペラード」の牧港誠之氏も、銀華文学賞で何度も注目を集めている作家で、特に沖縄の漁師を題材にした作品は光っていた。今回は横浜の港湾を舞台にした小説で、わかりやすく、まとまりがよかった。私としては沖縄を素材にした作品を読んだときのほうが強烈な印象があり、本質的な輝きを覚えたが、あのときは当選作に推しながら同意が得られなかったことに、残念な思いがあった。賞には運というものがあり、それをたぐり寄せるのも力のうちかもしれない。牧港氏も苦渋に満ちた人生を経て、負の領域で力強く生きる者の輝きを描いて、硬質な味を醸している点では、冴場氏と共通したものがある。男っぽい孤独な生き方の背に屹立する純白さが映えている。厚みに敬意と賞賛を払うべき点でも、冴場氏と重な

るものがある。二人の「男」の作家の軌跡に拍手を送りたい。

「埋み火」（土岐田耕）と「一初」（皆笹麻希江）も当選圏内の作品だったが、他の選考委員の支持が得られなかった。

「埋み火」は老年紳士の三五歳年下の女性との精神的な恋愛である。知性や年齢によって抑制されている分よけいに燃焼感が強く、ゲーテの言う「親和力」のようなものによって濃密に燃えさかる男女の性の奥が見える作品となっている。男女間の引き合う力は、年齢差も超え、互いの家庭も超えて炎の柱としてこの世界に立つ熱いエネルギーを開示している点で、恋愛の本質を覗かせている。こういう力が仕事や生き方に還流してくる大きなダイナミズムを匂わせている点でも、ひろがりを感じる。この作品には、大規模なスケールで動く社会のある部分のリアリティが裏打ちされていて、その動きに実際に携わってきた確かな感触が、文章の風格となって香りを高めている。最後がもっと抑制のうちに燃焼を純化できたら、文芸作品としての結晶度が高まっただろう。これだけの恋愛は多くの人が読むものとして残すに値するだろうし、いずれ本にもなるはずなので、そのときにもう一度引き締め、磨いて、純度の高いものにしてほしい。

「一初」は、粋な作品で、流れのよい軽妙なタッチは芸が高い。歯切れよく、小気味いい文のリズムは、低く高く起伏をなしながら流麗な調べを奏でている。関西弁と上方の気質が生きて文章に溶け込んでいる。男の浮いた心理などをよく捉えて、文体に乗せて生き生きと踊らせている。ところどころにチクリと気のきいた描写や一文が光を放っている。この文章の芸は一流である。読むことのなかに酩酊感を覚えさせてくれるまれな文章は、河林賞に値する。

歴史小説賞は今回たくさんの秀作が寄せられた。なかなかお目にかからない記録の掘り起こしが多数あって、歴史のおもしろさ、過去の豊かさをあらためて堪能させられた。なかでも鎌倉幕府三代将軍実朝を扱った北風嘉己氏の「淡雪―実朝の死―」は、大江広元を軸に実朝や北条氏の人間群が鮮明に描かれていて、当時の輪郭がくっきりと蘇ってきた。オーソドックスな筆致は、落ち着きがあり、その沈着さが悲劇を浮き上がらせている。知られていることではあるが、その臨場感はあらためて歴史の本質を剔出している明確さを備えている。労作の結晶と言える。

剔出という点では久保協一氏の「舞草刀」も、戦国の東北大名家の存続をめぐる陰謀が緊張感のある筆致で描かれていて、読み応えがあった。その彫琢においては、「淡雪―実朝の死―」に勝るとも劣らないが、題材が知られていない点、また出だしのシーンがチャンバラ風で通俗に受け取られがちな点で損をしている。昨年に続いてよく掘り起こされている力作であることはまちがいなく、持続力をも含めてその力を確認した。歴史小説は、保元の乱を扱った

「異聞保元の乱」（小笠原新）、実朝をめぐっての「小倉百人一首実朝歌余談」（尾崎克之）、唐に対して戦い抜いた高句麗の将軍を捉えた「北の独裁者の死」（迎来太郎）など多彩で、佳作を含めてこの領域における熟年層の充実を感じた。

今回優秀賞の数が多かったのも、やはり力を持った作品が多く集まったためで、どの作品も独自の領域を造形していた。六藍光洋氏はエッセイ賞でおなじみの書き手だが、今回「言葉は武器なり」という小説に挑戦し、カンボジアのポル・ポト時代のことを描いて、強烈な世界を切り取った。フランスの留学生カンボジア人の同僚との苦学の交流を通して、クメール・ルージュのために尽くしていた彼が帰国後逆に殺される運命を辿ることで、ポル・ポトの政治の陰惨な一面が体感されるところに、小説としての成立がある。留学生時代の貧しさを貫いて祖国のために献身する彼が、むしろ留学生であったために殺される悲劇性は、カンボジアの殺戮の時代の狂気を戦慄として伝えてくる。あの時代を体験を通して実感として描いている小説は日本の文学ではお目にかからない。価値の高い作品である。ただ、タイトルがテーマを象徴していないのが惜しまれた。「言葉は武器なり」という言葉は留学生時代には外国人であり赤貧に耐える彼にとって苦難を乗り越える赤裸裸な言葉であったことはよく伝わってくるが、帰国後逆にフランス語を学んでいたことが災いして知識層としてツールスレンで虐殺されたとすれば、「言葉は災いなり」という逆のテーマが持ち上がってくる。この関連をどうするのか、考え切っていないように思われた。殺される段階になって、裏切られたにしてもなおかつその言葉を拠り所にし、カンボジアのどこかに書き残していたりすれば、この言葉は真にタイトルになっていただろう。文学としての処理が完結していない恨みがあった。

丹羽加奈子氏の「蓋」は、頭蓋骨を除去して脳が開いたままの意識を興味深く展開していて、意識の一つの存在模様を開き示している。その大胆な設定は評価できる。体験をフィクション化して脳や意識の危うさ、脆さを剔出した手腕は鋭利で、最後も愛情に包まれたユーモアによって災厄を乗り越えるシーンも理知の鮮やかな一閃が走っている。ただ、ここまで見事な構築をしたのなら、さらに深く意識の構造を存在や愛情の根底まで掘り下げられそうな気もする。奇怪さ、奇妙さだけでなく、恐怖の領域にまで迫り得たら、さらに強烈になっただろうし、愛情というものの力も大きく剔出できただろう。

星野透氏の「片影」は、実に読ませる作品で、文章に宿る心理の襞がコクのある職人芸でひしひしと伝わってくる。よく煮込んだ滋味ある料理を味わっているような気分で堪能させられた。文章としては星野氏と皆笹氏が今回の応募

作の中では双璧だろう。文章の機微でじっくりした味を読ませる作品は、そうはない。地味な素材であっても、その女性の姿はいつまでも人生の深い味として残る。たまらない残像がある。続けて河林賞を受賞してもおかしくない作品だった。

神通明美氏の「蕎麦の花」は素朴な作品だが、交通事故ですべてを失った男が、ふとした異性の愛情の記憶で生きる力を得て再生するストーリーである。単純でも、生きる意志を回復する過程は確かな感動があり、フィクションに託された筆者のある体験が籠められているところに、読後感の快い信頼が備わっている。蕎麦畑の白い蝶の描写は胸に残る。

上野雄三氏の「仙薬」は、古典的な題材を現代のグローバル化した世界のなかに復活させたものだが、不老不死の薬を商売にする話を、実にうまくおもしろく作り上げている。この超現実的な、しかもだれもが願望する、あまりにも普遍的な話は、現代に蘇らせようとすると眉唾ものにならざるをえないのだが、それを感じさせずに読ませていく筆力は、きわめて高いものがある。ちなみに予選では最高点で上ってきた。「賽乃目」といういかがわしい主軸の男は小説的な魅力がたっぷりで、こういう人物を造形できる手腕だけでも、注目に値する。ここに漂う雰囲気が、嘘だとわかっていながらのめりこむ人間の業の深さと繋がっていて、博打や詐欺に身を投じる負のスリルを濃く立ちこめさせている。ただ、最後が時間がなかったせいか、あっさりしていて物足りなさが残ったため勝ち抜けなかった。編集・発表の段階で推敲してもらったが、それが成功しているかどうかは、読者に委ねたい。力量を買う。次作を見たい。

今回の応募作のなかで、触れておかなければならない作品群が二つある。一つは東北大震災を素材にしたもので、予選から上ってきたものだけで三作あった。「思えばいと疾し」（形山謙一）と「津波」（成瀬秋彦）、「転校生」（室町眞）がその素材だが、タイムリーで話題性はあるし、うまく材料を小説の構築の中に組み込んではいるものの、地震と津波という対象があまりに大きすぎて、どうしても真正面からは受け止めきれていない物足りなさがある。圧倒的な大自然災害とその底に沈む人間の悲惨さと向き合い、それを文学作品として提示するには、本気で立ち向かっていく覚悟と気合いがいる。「津波」は表現の力も高くそれを心理に重ねる手腕も光っているが、この斜めの姿勢で文学賞に受け入れてしまうと、流行に流れる危険がある。あえて評価を抑えた。

もう一つの気になる作品群は、学校の子供たちの内面の気味悪さを扱ったものである。「悪霊」（朝永潔）、「誰かが静かにやってくる」（山田吉生）、「声が響く」（岡野弘樹）は登校拒否など学校生活でいじめられる立場にある生徒や、

引きこもり気味の青少年が、逆にある力に取り憑かれ、奇怪なパワーをもって現実を逆転させていく変異の姿を示している。これらは現代の青少年層を浸食しているある奇妙な力を象徴しているようで気にかかった。「悪霊」は筆力のある展開で一気に読ませるが、到達したところは入り口で、これからほんとうの物語が始まるという地点で終わっている。長篇にすればもっといろいろ出てきそうな気配がある。これで評価するのは惜しい気がした。たまたま三作が集まっただけなのか、それともこれが現実の一部を実際に示していて、根はもっと深いのか、時代の恐怖に繋がっている危惧も払拭できなかった。

総じて、銀華文学賞に寄せられてくる作品は質量ともに上がっている。熟年、老年パワーが開花しつつある。次回もさらに大輪の花群を期待したい。

選考会風景／アジア文化社新社屋地下図書室で

文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞
イラスト・漫画賞

授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わし合いましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十四年一月二十八日（土）
授賞式午後二時／祝賀会・新年懇親会五時半
会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール
東京都大田区下丸子三・一・三
TEL03・3750・1611
※東急・多摩川線「下丸子」駅前
会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円
問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮
TEL〇三・五七〇六・七八四七里見・五十嵐まで
または090-8171-9771まで

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵　おざわ　みちえ

1954茨城県生まれ
千葉大人文学科卒
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作
06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞
日本ペンクラブ会員

大高雅博　おおたか　まさひろ

1954石川県生まれ　日大国文学科卒
80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

都築隆広　つづき　たかひろ

1978山梨県生まれ　東海大文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文學界新人賞受賞
「狼を見る」（「文芸思潮」）「ハンコの町の鰻がいる家」（「三田文学」）他
月刊「望星」書評員

八覚正大　はっかく　まさひろ

1952東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
教師・精神対話士
92「十二階」で新潮新人賞受賞
小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」やルポ『夜光の時計』など
教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

五十嵐勉　いがらし　つとむ

1949山梨県生まれ　早大文芸科卒
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90タイ在住、カンボジア問題を取材しながら東南アジアを遍歴「東南アジア通信」「アジアウェーブ」創刊・編集長
主著に『緑の手紙』（読売新聞インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』（健友館文学賞）　他の小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

作家集団「塊」メンバー

第９回　銀華文学賞　作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格● 2012年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定● 400字詰原稿用紙50枚以内（20枚くらいでも可／原稿用紙の場合は必ずA4原稿用紙を使用。B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーを応募するのが望ましい）。※応募審査料1000円をお願いします。

別紙に①応募部門（2012年度第9回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格）⑤〒（ないものは失格）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記入。⑨応募審査料1000円を郵便為替（何も記入しない）で同封。外国からは12USドル。

応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社
文芸思潮「銀華文学賞」係
TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848　E-mail　asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）
河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（数名）
奨励賞■賞状・賞メダル

選考委員●作家集団「塊」メンバー

※恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

締切● 2012年6月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2012年11月末発売の「文芸思潮」48号に発表する。受賞作は2013年1月末発売の「文芸思潮」49号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靭な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

河林満賞受賞作

一初

皆笹麻希江

まさか猛男が女を囲えるとは思わなかった。六十七歳といえば、昔ならあの世のほうが近い。

綾乃は、猛男の店でパートを募集した際、面接に来た女だ。猛男の店は、摂津の国一ノ宮、住吉大社の鳥居前にあり、店を出ると正面に朱色の太鼓橋が見えた。

女房の律子は、綾乃の顔とテーブルに置かれた履歴書を見比べると、左に首をかしげ、猛男に向けて目を流した。綾乃は、ぽっちゃりとした体つきのわりに、足首が細かった。猛男は中澤写真館の入り婿である。義父が逝き、四つ下の律子とふたりで店を切り盛りして、二十年が経とうとしていた。

今年一月、三十一歳になった一人娘の真子が、大阪のベイエリアにチャペルと、三つのゲストハウスを持つ結婚式場にフォトスタジオを構えた。なんでも海を望む水上コテージをイメージしたバリ風、草原の中で憩うモロッコ風、高貴な雰囲気が漂うヴィクトリア風にしつらえた邸宅を自宅に見立て、客をもてなす結婚式が流行りらしい。

真子はハワイ語で、愛・感謝の意味を持つオポノポノとスタジオの名前を決め、張り切っていたが、事務仕事は苦手らしい。そこで律子が、経理事務を担当すると猛男には相談もなく決められていた。

律子の右手が、猛男の左腿をつついた。猛男は、顎を引き咳払いをひとつした。

「天王寺も降ってましたか、雨」

と無難に問いかける。

綾乃は、眠そうな奥二重の目を窓に向け、のんびり言った。

「こない、えろうは降ってませんでしたけど……」

綾乃の言葉が、終わるか終わらないうちに、今度は律子が咳払いをした。

「どうして、うちの店に応募されたの」

いつもは大阪弁を繰っている奴が、なにを澄ましとんねんと、猛男が心の中で毒づいているあいだに、律子は綾乃に的を得た質問を、直球で投げていた。

受け取った綾乃は、ゆっくりとした山なりのボールを投げ返すように応えた。

猛男は、最後までボール遊びに加えてもらえず、ただ相槌を打つだけだった。

綾乃が椅子を引こうとしたとき、電話が鳴った。律子が奥へ入ると、綾乃は大きく息を吐き、慌てて口を押さえた。猛男は、力の抜けた女の肩に手を伸ばし、撫でそうになる思いを抑えていた。

午後から面接に来た真子の同級生を律子は雇うと決めた。綾乃は愚鈍そうだと律子は言った。綾乃の履歴書は、今回は、残念ながらご希望に沿うことが出来ません。貴女様の今後のご活躍をお祈りします。とボールペンで書かれた一枚の便箋と共に封筒に入れられた。律子は裏返すと、のりを舐めて封をした。

翌日、猛男は写真教室に出向く日だった。毎週木曜日、阿倍野区民センターで定年後に趣味で始めた男性や、主婦たち八名を受け持っている。

昨夜、店を閉める際、猛男はレジの横に置かれた綾乃宛の封書を鞄の中に入れた。

松崎町といえば区民センターから東に五分程のところである。女の肩の丸みが目に浮かんだ。いつもは昼食を済ませてから店を出るのだが、今日は、喜寿になる知人の記念写真展を覗くからと律子に言い、猛男は十一時前に店を出た。早口で晩飯もいらんと付け加えた。住吉鳥居前の停車場に背を向け、上町線の住吉公園駅に向かった。難波・和歌山間を走る本線の高架の手前を北に入ると、ちんちん電車と呼ばれる一両の路面電車が止まっている。猛男が学生の頃は、木製かと思えるような深緑の素朴な電車だった。今、止まっているそれは、窓を境に上半分が鮮やかな夏空の色、下半分は山吹色をまとっていた。横っ腹には、熟れたトマトの色で、金・銀・プラチナ売るなら岡田屋と書かれている。目の眩みそうな配色と宣伝に、猛男は大阪らしさを感心すると同時に、風情のなさに溜息をついた。

うしろから、にぎやかな子供の声が聞こえた。

「あっ、アイアイや」

近所の園児たちが猛男を見つけ、はやし立てた。猛男は

子供たちの通う赤い橋幼稚園で、年中行事のたび写真撮影をしている。

猛男は、園児たちに、

「写真屋のおっちゃん」

と呼びかけられると、一オクターブ高い声で

「あいあ～い」

と応えていた。それでアイアイというあだ名がついたと、長いあいだ思っていた。それが、昨年の卒園式の日、ひとりの女児が一枚の絵を猛男に差し出した。

「これ、おっちゃんにそっくりやからあげる」

絵の中で、耳と指が異様に大きい猫のような動物が、木の上から光る目を向けていた。

数人の子供たちが、猛男を囲むと歌い始めた。

♪アイアイ・アイアイ、お猿さんだよぉ……

（俺はこんな顔しとんのか）

猛男は、手の中にある絵を見て肩を落とした。猛男より、拳ひとつ背の高い律子の声が頭上から聞こえたような気がした。

「私、色黒いでっしゃろ。せやさかいインドのカラスって言われてますねん」

律子は、コンプレックスも笑いにすれば勝ちだと言っていた。

子供たちの列が遠ざかり、発車のベルが鳴った。

チンチンと威勢の良い音を鳴らし電車は走り出した。猛男はいつも西側の一番前に座る。紀州街道を渡ると電車はゆっくりと上ってゆく。昨日の雨で桜は半分散っていた。どこからか雪柳の香りが漂ってきた。神ノ木の停車場は丘の上にあった。窓から下を覗くと、高野山行きの特急列車が南に向かって行き過ぎた。一〇分ほどすると、猛男が中澤姓になるまで過ごした家のあたりが、電車道沿いに見える。今は公園の一部になっていた。

（ちょうどブランコが揺れているあたりやなぁ）

何度、通り過ぎても懐かしさが込み上げる。過去に思いを馳せるのは、今が幸せでないからだと律子が言い、口論になったこともあった。

区民センターは阿倍野の西にある。猛男は、綾乃に手土産を下げていこうと、百貨店のある終点、天王寺駅前で降りた。駅前は、すっかり変わっていた。昭和四十年代、この交差点の真ん中で、軽やかにステップを踏み、優雅な身振りで交通整理をする名物巡査がいた。あの頃の猛男は、黒々した髪も充分にあった。どこへ行くにも、買ったばかりのライカのカメラを肩に下げ、この天王寺の歩道橋の上では、名物巡査の勇姿を撮った。

阿部野橋駅は三年後の春に、高さ日本一のターミナルビルになる。見上げると、鉄骨を組み上げるクレーンが、まるで街を破壊する二頭の恐竜のように見えた。

甘ったるい香りに誘われ、赤い屋台に並ぶクレープを猛男は包んでもらった。すれちがう人たちに、カラフルな袋を持つ手と猛男の顔を、見比べられているような気がし、うぐいす色のハンチングを心持ち深く、かぶり直した。

（百貨店の包みのほうが良かったかいなぁ）

猛男は、匂いにつられた自分を叱りながら、袋を抱え込み、人の少なそうな道を東に入った。庚申街道を越えると南側に綾乃の住む市営住宅が見えてきた。

ここまで来て、猛男は自分のしている行動が不自然だと思い始めた。いくら近所に用があったと言い訳しても、不採用通知を届けるのはおかしい。郵便受けに入れて帰ろうと思ったが、消印のない封書を受け取る方は、気味が悪いのではないかとも考えた。ストーカー行為と受け取られても仕方ない。

あれこれ考え、戻ろうとしたとき、目の前に綾乃の足首が過ぎった。猛男は思わず唾を飲み込んだ。顔を上げると見ず知らずの女が不審そうに猛男を見ていた。額に汗がにじんだ。立ち止まり、家を探すふりをして左右を見渡すと郵便局が見えた。猛男は、急ぎ足でポストに向かう。封筒を持つ手に力をこめ、もう一度、綾乃に逢わせて欲しいと願った。そのとき、手前のＡＴＭから通帳をハンドバックにしまいながら出てきた女とぶつかった。クレープの入った派手な袋が手から落ち、慌てた猛男は袋を踏んでしまった。

「すみません……」

袋を拾い上げた女と、ハンチングの中から上目遣いの猛男の目があった。綾乃だった。

猛男は、願いが通じたと小躍りしたい気持ちを鎮めた。

「いやぁ、出掛けに出し忘れまして」

表書きを上にした封書を綾乃の前に殊勝に差し出し、受け取った生暖かいクレープを鞄の中に押し入れた。綾乃は、丸いレースの襟がついた白いブラウスに、紺のプリーツスカートをはいていた。猛男は、ひと昔前の女学生のような格好がまぶしかった。

阿倍野筋までの間、綾乃は猛男の左側を半歩遅れて歩いた。田園という喫茶店の前で綾乃は立ち止まり言った。

「ここ、私が高校生の時からありますねん」

猛男がドアを押し中に入ると、綾乃は胸の前で小さく手を叩きながら、店内を見渡した。

「変わってへんわぁ」

綾乃の声を聞きつけ女主人が出てきた。

「そうでっしゃろ、もう五十年でっせ」

しわがれた声を出し、一番奥のテーブルにふたりを座らせた。

猛男は、出されたおしぼりで丁寧に手を拭いた。いつもなら顔も拭くのだが、今日は綾乃の手前、遠慮した。綾乃

は膝の上に手を置き、まっすぐ猛男を見た。
拭いたばかりの掌が、じっとりしてきた。猛男はテーブルに肘をつき、両手を合わせると、口の前で左右に動かしたり指を組んだりと落ち着かなかった。目だけが、綾乃の体の線をつないでいた。
「あたし……女の方には好かれない、たちなんです」
綾乃は言うと、一瞬挑むような目をした。しかし、すぐにその目を伏せ、ハンドバックから履歴書を取り出しひろげた。
「若う見えますなぁ、四十には見えんわ」
うわずった自分の声を、猛男は自分で意識した。
綾乃は、昔と比べ食生活や生活様式が変わっている。だから実年齢の八掛けが今の肉体的、精神的年齢だと、女性週刊誌に載っていたと述べた。
「ほな、僕は五十三でんな」
「そうですかぁ、私は三十二になりました」
ふたりとも、まだまだこれからだと笑い合った。
綾乃の笑いが仕舞い込まれぬうち、猛男は、
「今晩、食事しまへんか。六時にここの前で待ってまっさかい」
と誘った。綾乃は、すんなり承諾した。
猛男は鼻歌まじりに教室へ入ったが、生徒たちが撮ってきた作品の批評会はうわのそらだった。毎年ゴールデンウィーク明けに出かける撮影旅行の行き先も、どこでも同じだと言ってしまい、帰り際、リーダー格の主婦、山田悦子に廊下でねちねち絞られた。
区民センターを出て、信号待ちをしている間、猛男は右の耳たぶを掴むと、数回、下に引っ張った。嬉しいときに出る癖が、久しぶりに出た。
ＪＲ天王寺駅の北、谷町筋沿いに商店街がある。毎月二一日のお大師さんの日には四天王寺さんに詣でる人たちで賑わう。そのアーケード筋を東に入ったところに、旧住友財閥の別邸が料理屋になって残っている。黒塀に囲まれ、手入れの行き届いた見越しの松が客を迎えた。部屋には、花の名前がつけられ、なかでも離れの芙蓉の間は予約の取れない部屋で有名であった。
猛男と綾乃は、梅の間の庭に面した座卓で、会席料理を味わった。木の芽和えに、鰆（さわら）の菜種焼き、独活（うど）やタラの芽の天ぷらなど、どの皿にも桜の花があしらわれ、春の香りが口の中に広がった。
綾乃は、辛口の日本酒をつつましく飲みながら、箸をこまめに動かした。しのぎに出された紋甲烏賊の棒寿司が美味しいと、猛男の分まで箸をのばした。
猛男は、紋甲烏賊の白さと女のつるつるした肌が重なり目を細めた。
筍（たけのこ）ご飯と赤だしも綾乃はきれいに平らげた。猛男はメロンの皿を引き寄せ、フォークを持ったまま言った。
「時々こないして飯、食べまへんか」
しばらく沈黙したあと、
「個人的に雇ってくれはるんなら」
綾乃は、くっくっと喉を鳴らし悪びれない笑みを浮かべた。
店を出てからも綾乃は、猛男の少し後ろをついてきた。そんな女を猛男は、鳩のようだと思った。カラスを見慣れている猛男は、どうしても鳩を自分のものにしたいと思った。
猛男は、綾乃の腰を引き寄せようと左手をのばしたが、うまくかわされた。猛男は泳いだ手で鞄を持ち替えた。
次の一手をどう出せばよいのか思い巡らせていると、綾乃は履歴書を差し出した。
「二次面接のご連絡をお待ちしています」
綾乃はかしこまった口調で言うと、色気をにじませた目で猛男を見た。
帰りの電車も今朝乗ったのと同じものだった。朝見た時は興ざめだった艶やかなツートンカラーの車両が、今は、猛男の前途を祝福しているように思えた。
（十八金の指輪でも、プラチナのネックレスでも買いまっせ）
座席に座った猛男は、次の面接日をいつにしようかと考えながら、耳たぶを引っ張っていた。
猛男が店に戻ると、住まいになっている二階は電気がついていなかった。時計を見るとまだ十時前である。宵っ張りの律子が不貞寝しているはずがない。
メッセージがあると留守番電話が教えていた。光るボタンを押すと真子が母を借りると伝えていた。
「やっほー」
忘れていた言葉が口に出た。声は、猛男の心の中でこだました。いそいそと綾乃の履歴書を取り出し、電話番号を繰り返し読み上げる。
「ろくろくごぉいち、はち、いち、はち、よん、六六五一-八一八四」
猛男は、番号を指でなぞりながら、うまい語呂合わせがないか考えた。
「むごいのはいやよ」
綾乃の声が耳元で聞こえたような気がした。語呂を合わせた電話番号を、猛男は頭に叩き込んだ。
（酷いことなんかしまっかいな）
猛男は心の中で綾乃に言った。そして階段を下りると用のなくなった履歴書を破り、クレープの袋の中に入れるとゴミ箱に捨てた。
「明日から忙しなる」
猛男は神棚の前で柏手（かしわで）を打った。いつもより腑抜けた音

がした。

猛男は、居眠りをしていた。夢うつつの中でおふくろがミシンを踏んでいた。細く目を開けると綾乃がパソコンのキーを叩いている。内職をしたいと綾乃が言ったとき、猛男は、てっきりミシンを踏むものだと思った。

猛男が探してきたこの家は、住吉と天王寺のあいだの東天下茶屋にあった。駅前の通りを西に行き、高田質店を南へ下がる。「洗い張りします」「みかげや」と書かれた看板の向こうの路地を東に入ると、忘れ去られたような一角があった。つきあたりの平屋だが、庭に桃の木がある家は、妾宅らしさを醸し出していると猛男は満足していた。週に三日、猛男はこの家を訪ねた。

綾乃の内職がどんなものか、猛男はなんど聞いても判らなかった。ネットと言われれば網が浮かび、ソーホーと聞くと疱瘡の親戚かと思った。

猛男は、寝ころんだまま両腕を伸ばし目を開けると、目の前に綾乃のまるい指があった。

「疲れたはりますの」

畳のあとがついた猛男の頬を指先でなでる綾乃の手首を掴み、引き寄せ抱きしめた。

（店で雇わんで良かった）

綾乃は、口数は少ないが逢うたびにほどけてきた。何を考えているのか判らないが、猛男にとっては都合の良い女だ。猛男の言うままに体を開き、なすがままにさせてくれた。西陽のあたった綾乃の肌は、琺瑯のように鈍く輝いていた。

猛男は台所にも立った。茶碗いっぱいのご飯を握ると、それを焼き海苔に包みフライパンの上でころがした。

「爆弾やぞぉ」

綾乃は、可笑しがり勢いよく頬張った。女の口元についたご飯粒を、猛男は人差指でさらうように取り、自分の口に入れた。卵焼きは好物の砂糖を入れてもよいし、味噌汁をご飯にかけても文句を言うものはいない。

綾乃が寝冷えで床についたときは、おかゆを炊いてやった。猛男を見る熱っぽい目と、綾乃が吐く息の匂いがたまらなかった。

ここは、生きる者の根本的な欲を満たしてくれる。パラダイスだと猛男はひとり、ほくそ笑んだ。

大阪の夏祭りの最後を飾る住吉祭りは、大阪府の指定無形文化財に指定されており、半年の間に溜まった穢れを祓う夏越大祓神事と言われている。大鳥居の前、五月殿、そして五月殿から本殿の間に設けられた、茅の輪をくぐり穢れを祓う。

この日、猛男は友人の哲夫と人波の中にいた。はるか前方に、金の烏帽子をかぶりピンクの薄物を着た夏越女や牛

若丸のような稚児の行列が見えた。

「住吉の夏越しの祓する人は千年のよはいのぶというなり」

千年の寿命が延びるという縁起の良い和歌を口ずさみながら、行列が茅の輪をくぐってゆく。

「このあと、一杯行こか」

哲夫は、暑さと人ごみの中で噴き出す汗を拭いながら猛男を誘った。ふたりは、潮街道を抜け、高灯籠を南に入った。陽の落ちる前の住吉新地は、化粧前の女のようだ。

哲夫が、のれんの上がっていない馴染みの店の格子戸を開けた。最近、改装したのか木の香りがした。

カウンターの向こうで仕込みをしていた大将が、生ビールを注いだ。

「あわわわ」

哲夫は、口の周りを泡だらけにして飲み干した。

「最近、どないや」

哲夫に問われ、猛男は、にやりと口元をゆがめると綾乃の話を始めた。

「日陰の女には、ぴったりなん当てたなぁ」

日陰の女と言われた猛男は、子供の頃、井戸端の陰に咲いていた花を思いだした。あやめに似た花で外側の花びらに黄色いまだら模様があった。いつも気だるそうに咲いていた。

「ええモンやるわ」

哲夫が後ろの壁に掛けたショルダーバックから、横文字の書かれたひしゃげた箱を取り出した。哲夫は声をひそめて言った。

「どや、これアメリカから個人輸入したんや」

リビトラという商品名はラテン語で「男の生命」を意味する。この手の薬で有名なバイアグラより副作用が少なくお勧め商品だとカウンターに手をつき、哲夫は少し胸を張った。そして、半分以上、指で押しつぶされた銀色のシートを猛男にくれた。

「いらっしゃいませ」

奥からお仕着せの着物を着た女が出てきた。

女はのれんを出した。戻って来たとき、哲夫と女の目が、素早く交わされた。

「お前もうまいことやっとんねんな」

猛男は言うと哲夫の肩を叩いた。その夜、男ふたりは客が入ってくるたびに乾杯し、遅くまで飲んだ。

秋の婚礼シーズンを迎え、律子は娘のマンションに泊まる日が増えた。しかし猛男は、桃の木の家で朝を迎えることはしなかった。

哲夫からもらった薬を、猛男はいつも鞄にしのばせていた。飲んでみたかったが、飲むのが怖かった。

ある日、猛男の鞄を受け取った綾乃が上がり框に、けつまずいた。鞄の中から銀色のシートが落ちた。

「あらっ、これは……」

綾乃は、拾い上げると、ひらひらと手の先で振った。七十を越えた、前の男も同じ薬を飲んでいた。

「グレイトエナジー、精力絶倫」

飲むたびに得意満面にポパイの真似をし、力こぶを作る男の顔を、綾乃は間抜けた顔だと思っていた。

綾乃は、女と寝るために何が入っているか判らない薬を飲む男を見下していた。

「実験室で作られた薬など飲むもんやないわ」

綾乃は、根拠のない説を口にした。

「どういうこっちゃ」

尋ねる猛男に、お天道さんの恵みが一番の薬だと綾乃は言い、上機嫌で台所に入った。

猛男は仏頂面で座椅子に座ると、見たくもないテレビのスイッチを入れた。しばらくすると、なつかしい匂いがしてきた。おふくろが煎じていた薬の匂いに似ていた。

綾乃の生家は、福井の小浜から京都に鯖を運んだ西の街道、国道一六二号線沿いにあった。明治三五年に、漢方薬の店「にぐすりや」として創業され、昭和の初めに薬師湯の旅籠として営業を始めた。

綾乃が小学校に入る前、にぐすりやを常宿にしていた男と母は行方をくらました。小さな集落に噂が立ち、綾乃は峠を越えた集落の山持ちの夫婦の元に出された。養父母は、山で採れる薬草や山菜、きのこを採取し生計を立てていた。

都会に出たかった綾乃は、大阪に住む養母の妹夫婦に同居を頼み込み、大阪の高校に進学した。

叔母といっても他人である。ましてや、その夫ならなおさらのことであった。高校三年の夏休みのある日、叔母が出かけ、綾乃が昼食の素麺をゆがいていると、いきなり叔父がうしろから綾乃を羽交い絞めにした。綾乃は倒された。

翌日、綾乃は帰郷した。突然帰ってきた綾乃に養母は驚いたが何も聞かなかった。しかし綾乃が大阪に戻る前夜、養母は薬草をブレンドしたパックと「附子」と書かれた袋を綾乃に渡した。養母は戻ったら叔父に、これを見せるよう言った。附子というのは、トリカブトの根でアルカイドという有毒が含まれている。叔父は綾乃に二度と手を出さなかった。

さるのこしかけ、さんしゅゆ、牡丹の根、くこの実に附子。どれも老化予防の妙薬である。綾乃は今も養母から薬草を送ってもらい、自分で煎じて飲んでいた。綾乃が長年使っている土瓶は年季が入り持ち手がはずれていた。

綾乃はその土瓶と湯呑みを猛男の前に持ってきた。ふたつの湯呑みを並べ茶色い液体を均等に注ぐ。綾乃は額の前に湯飲みを持上げ、一気に飲み干した。つられて飲んだ猛

男は、あまりの苦さに慌てて台所にとび込み、水を飲んだ。

「良薬は口に苦し、言いますやろ」

綾乃は言うと、瞬発力より持続力のほうが大事だと含み笑いをした。

♪ずんずんずんずんどこ

ずんどこ節を口ずさみながら、猛男は店に帰ると、律子と真子が顔をそろえて待っていた。猛男は、いそいで難しい顔を作った。

律子が目で二階へ上がるように言った。真子は店のカーテンを引き、戸締りをしていた。

久しぶりに三人でテーブルを囲む。

「ちょっとお父さんに話があんねん」

真子が切り出した。

猛男の心臓がおののいた。綾乃の下ぶくれの顔を見慣れた猛男には、娘の尖った顎が、魔女のように見えた。嫌な予感が当たらぬよう、娘の足はいつの間に俺より長くなったのかと、気をそらせた。

「この店、改装してもかまへん？」

真子の甘えた声が、天使の声に聞こえた。

「よっしゃ、かまへんぞ」

と相好を崩し、言いそうになるのを、猛男は、すんでのところで止めた。

スタジオ・オポノポノでは、婚礼の写真撮影だけを行っていた。今後、七五三や成人式、家族の記念写真など、あらゆるシチュエーションの写真を、ウェディング会場の庭や施設を使用して、撮影させてもらえるように話をつけたらしい。そこで、ここを本店兼ショールームにしたいと言う。

「七五三やお宮参りは、ここで撮れるし」

ドレスや着物のレンタルもするつもりだと真子は言った。律子も異存はなく、その方がお洒落で時代にも合っていると後を押した。

猛男は、ほっとしながらも、律子が猛男の浮気を勘付いているかも知れないと思った。

（とりあえず矛先がこっちに向かわんよう、先に、かましといたろ）

「お前、先代からの店の名ぁ、変えてもええんか」

猛男は噛みつくように律子に向かって語気をあらげた。いつ店を閉めても良かった。ましてや店の名前など、猛男は少しもこだわっていなかった。ただ母娘ふたりで事を進める神経の鈍さが嫌だった。

「考えとく」

ぶっきら棒に言い、猛男は席を立った。緊張したせいか尿意を覚えていた。

十日ほど、猛男は桃の木の家に行かなかった。留守の間

に女たちが勝手なことをするやも知れないと考えると足が鈍った。

ふたりは、あの日以来、改装の話は持ち出さない。猛男からは、何も聞くものかと思っていた。

それでも猛男は、女たちが

（あない言うてきよったら、こない返したろ）

と、言ってきそうな事に対する答えを、シミュレーションするのに余念がなかった。

律子は、昼間、家事を済ませると娘のところに行き、夜は娘のマンションに泊まっていた。猛男は、パートの女に探りを入れてみたが、女は向こうの味方になっていた。

（俺は孤立無援で戦ってる）

猛男は肩幅に足を開くと、左の腰骨の横で両手の拳を縦に重ねた。そして息を整えると右手を顔の前から右上に伸ばし空を斬った。

「チャンバラごっこの練習ですか」

律子が呆れた声で言った。猛男が振り向くと、黒地に白の細いストライプの入ったパンツスーツを着、シャープなカラスになった律子が立っていた。

「何しに来たんじゃあ」

猛男は、ばつの悪さを隠すため普段より下品な物言いをした。

「私名義の通帳を取りに来たんや」

負けじと律子が「私名義」のところを強調し、険のある声で言った。

二階に上がる律子を追いかけ、猛男も階段を上がった。律子はコーヒーを入れ猛男の前に座った。砂糖を入れてやろうとすると、最近はブラックで飲んでいると鼻頭を上に向けた。

「お父さん、真子は結婚せんと仕事するって言うてますのや」

落ち着いた声で律子が言った。猛男はふて腐れた顔を下に向けた。

「結婚したって、なんやしら中将湯みたいな臭いをつけて帰ってくる亭主もいますしなぁ」

律子は嫌な臭いを払うように、鼻をゆがめて首を振るとコーヒーを飲んだ。

「あ、あれは、やな……写真教室の、ほら、その、お前も知ってる……山田はんがやなぁ……」

猛男はシミュレーションになかった展開にしどろもどろになった。

「ま、よろしわ」

鷹揚に律子は言うと、大事な話はこれからだと背筋をのばした。

今、若い企業家を支援する制度があり、今年中に融資を申し込むと、低金利で保証人も不要だと力説した。

「応援してやりましょ」

時代は変わる。次の時代への橋渡しという大事な役目を、私達は果たした。あとは若いもんのセンスで、新しいスタイルの店を築いてもらえば幸せではないか。律子の話しぶりは、まるで立候補者の演説のようだ。

猛男は律子の勢いに気圧されながら、腑に落ちない自分をどう落とそうか思案していた。

年が明け、工事が始まると猛男は、四国をまわってくると言い、桃の木の家に泊まった。

久しぶりに逢った綾乃の体は膨らんでいた。つき立ての餅のように柔らかく美味いが、三日も食べ続けると少々胃にもたれる。

猛男が思っていたより、工事は大掛かりだった。南隣の倉庫も住まいに改装される。

「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」

猛男の心がここにあらずと感じたのか、綾乃がとつぜん春の七草を言い上げた。

思えば、猛男は、律子と一緒になってから一度も七草粥を食べていない。猛男の母は歌を口ずさみながら七草を刻んでいた。母は女の仕事を黙々とこなしていた。父に口答えせず、子供を六人も産み育てた。それに比べ、うちの女どもは、猛男を立てることもせず、嬉々としてヘルメットをかぶり図面をチェックしていた。

「わぁ～」

猛男は布団の中にもぐり込むと、思いを晴らすように綾乃の体をくすぐった。

ふたりで、ほたえたあと猛男は、女房と娘のことを少し誇張して綾乃にこぼした。綾乃に一言慰めて欲しかった。

「私には、ようわかりませんわぁ。関係ないしぃ」

綾乃の声は白けていた。

「今が良ければ、それでええんちゃいますのん。女かて好きに生きてよろしやん」

綾乃は、服を身に着けながら言った。

（せやな、それでええんかもしれん）

期待が外れた猛男は、あまり深く考えんほうが身のためやと自分に言い聞かせた。

「うちら、雇用関係ですやんね」

まだ布団の中にいる猛男を見おろし綾乃は、にやにやしながら言った。

（この女も当世風やな）

薬草を煎じる綾乃と、雇用関係を主張する綾乃、どっちがほんまの綾乃なのか、猛男は納得がいかぬまま、ぐずぐずと身繕いをし、桃の木の家をあとにした。

桃の節句にお披露目した店は、ワンフロアーのガラス張

りで、モノトーンに統一されていた。中央にらせん階段があったが、猛男は東側に設けられた細い階段を使って二階に上がった。暗室だけが居心地悪そうに残っていた。

融資額や返済期限など、新店舗に関わることは一切、猛男に知らされなかった。母娘が綾乃との関係を知り、復讐をしているのではと、猛男は考えるようになった。

店も、女房も、娘も、猛男はみな自分のものだと思っていた。

（俺のものがあったから、綾乃も俺のものにしたかった）

しかし、そうではなかったと気が付いた今、猛男は綾乃を少々うとましく思い始めた。

（パートで来た女や、短期でええやろ）

やるせない思いを抱え猛男は暗室に入った。ここは予告なしには誰も入れない聖域である。義父も猛男も、自分たちの都合が悪くなると、ここに入った。義父は、律子が産まれるとき垣間見た分娩中の義母の形相が恐ろしくて、ここへ逃げ込んだと言っていた。

ある時、紙焼きしている猛男に、義父がぽつんと言った。

「ポジとネガ、ふたつでひとつ、おんなじもんですねんな」

今さらなにを言い出すのかと、猛男は知らんふりをし、作業を続けた。義父は独り言のように呟いた。

「正反対のもんやけど離れられへん。陰と陽や。男と女にも当てはまりよる。それに、光が美しく輝けんのは、闇があるからや。闇を恐ろしもんやと作り上げ、排除しようとすんのは、人間のエゴちゃうやろか」

猛男は義父の言葉に戸惑いながら生返事をした。

のちになって猛男は、この義父の言葉を、長所は短所、短所は長所だと理解した。ときに、浮気心を悪いと排除するのは人のエゴやないかと自分の都合の良い解釈をした。

猛男が暗室をでると、ドアの前に大きめの茶封筒が立てかけてあった。住吉大社からである。猛男は福が来たかと思い、いそいで封を切った。

住吉大神御鎮座一八〇〇年になる今年、平成二三年五月に記念大祭が執り行われる。その際の公式撮影者のひとりに猛男の名前があった。さまざまな奉祝行事や神事のすべてを写真におさめる大事な仕事である。末尾に、くれぐれも潔斎して臨むよう書かれていた。

そういえば、若い頃は毎朝、本宮を参り、月初めの辰の日は、欠かさず四つの社を巡拝していた。種貸社で神さんから商売の元手となるお種銭を授かる。集金の守護神は大歳社だ。子供がなかなか授からず、浅沢社の弁天さんに願をかけた日もあった。そして楠くん社の黒袴と水色に白の水玉模様の羽織を着た一対の招き猫は、真子が可愛いとお気に入りだった。目に見えるものばかりにとらわれ、目に見えない大事な心の在り処を猛男は忘れていた。

四月の末、猛男は意を決して桃の木の家を訪れた。

（ちょっとよけめの金を渡せば済むこっちゃ）

懐に手を当て猛男が路地を入ると、昔、井戸端で見た花が咲いていた。一輪だけ、奇形なのか、ぼってりとした淡い紫の重たそうな花の真ん中から、黄色いめしべが突き出ていた。まるで綾乃だ。

（嫌なものを見た）

猛男は、目をそらし引き戸を開けた。

ビールを運んできた綾乃を座らせ、女房が勘付いたと話を切り出した。綾乃は、猛男が何度か見た悪びれない笑みを浮かべて聞いていた。

簡単に話は済んだ。そのまま帰るつもりだったが、ビールを持つ綾乃の手元が震えているのを見てグラスを受けた。猛男は、差し向かいで飲むのも最後だと思うと、気が緩んだ。グラスが空くのも早い。

ふと猛男は、綾乃に、おもてに咲いている花の名前を知っているかと聞いた。綾乃は、好きな花だと言った。

「あやめ科の花で、一番早く咲くから一初」

綾乃の生まれた村では、茅葺きの屋根に必ず一初を植える。一初は深く根を張る植物なので、大風、火災除けのまじないになった。

綾乃の目が光った。綾乃は口角を上げ上等の笑顔を猛男に向け言い放った。

「一初は知りませんけど……花菖蒲には毒がありますねん」

裏木戸から風が吹き抜けた。くしゃみが続けて二度でた。猛男の酔いは、いっぺんに醒めた。

みどりの日に、綾乃は出ていった。前の男からせしめた金と、二十五歳のとき、事故死した亭主の保険金に、猛男からもらった金を合わせると一千万に届いた。これでハーブショップでもしようと綾乃は決めていた。

連休明けに、桃の木の家の主が、パソコンと小さなカメラのレンズが残っていると猛男に言ってきた。猛男は処分してくれと頼んだ。

記念大祭の前日、猛男は楠くん社の裏手の林の中にある滝で心身を清めた。しかし、心の縁に付いた垢はこそげ取られず、神楽を舞う巫女のひとりに鼻の下が伸びた。

猛男は横書きの名刺を初めて手にした。中澤猛男と漢字で記された右上に、筆記体で猛男の名が印字されている。店では、真子が買ってきたスタンドカラーのシャツに、ワインレッドのアスコットタイを締めている。毎日、猛男は女たちの着せ替え人形にされていた。トレードマークだったうぐいす色のハンチングは、いつのまにか律子に捨てられていた。

女房と娘の思う壺にはめられた猛男が、ひとり店番をし

ているとき、飲み屋の女と歩く哲夫の姿がガラス越しに見えた。女が電車に乗ると、哲夫が猛男を手招きした。

「うまいことやっとんなぁ」

軽口をたたく猛男に、哲夫が一枚のＤＶＤを見せた。

「雌蕊（めしべ）」とタイトルのついたジャケットには、男が女と重なりあっている。男の目元は黒く塗りつぶされていたが、間違いなく猛男だ。ジャケットの裏には、桃の木の家の前に咲いていた、あのめしべの突き出た一初が、あざ笑うように写っていた。

「こ、こ、こんなん、出回っとんのんか」

猛男が言うと

「心配すな、裏も裏、もひとつ裏のモンや」

哲夫は慰めるように言ったが、猛男の耳には届かなかった。

猛男は、綾乃がパソコンで動画編集をするのが面白いと言っていたのを思い出した。

（あいつの内職ぅ……いや、待てよ……家主がパソコンとカメラを処分したあとかぁ……）

どちらにしても後の祭りである。猛男の脳裏に、センセーショナルに踊る三面記事の文字と三下り半という言葉が、かけ巡った。

「それにしても、あの薬の効果、絶大やってんなあ」

猛男は、腕を組み、満足気に言う哲夫に店番を頼むと、赤信号を住吉大社に向かって駆け出した。

（この年になって家追い出されたら、どないしてくれんねん）

猛男は、一番奥にある第一本宮の紅白の鈴緒を思い切り振った。萎びた鈴の音がした。

ふいに、うすら笑いを浮かべる綾乃の声が心の中でした。

「知ったはりますぅ、一初の花言葉」

たしか花言葉は「使者」だと言っていた。

「頼んますわ、住吉（すみよし）さん。悪い知らせは堪忍しとくなはれ。どうかええ使者、遣わしとくなはれや」

もう猛男には住吉大神しか、頼るものはなかった。猛男は深くこうべを垂れ、一心不乱に拍手を打った。張りのある音が境内に響き、通り過ぎた男の子が驚いて振り向いた。

猛男は、後ろ髪を引かれる思いで拝殿をあとにした。前をゆく子供が、母親にひかれた手を離し、舌を出すと、猛男に向かって二本の人差し指で両まぶたを下げた。

受賞の言葉

皆笹 麻希江

子供の頃、ちんちん電車が走る町に住んでいました。木造平屋建て、茶の間の天井には焼夷弾の落ちた跡がありました。祖父が、裏庭に自生するゲンノショウコを煎じていたせいか、天窓の開いた土間の台所には、子供のなつけない匂いが立ち込めていました。

鯉のぼりが泳ぎ始めると、玄関脇の井戸端に整列した花が咲きます。淡紫の花は、気だるそうに咲きながらも、妖しげな挑発を思春期の私に見せつけました。

花屋の店頭に並ばないその花と再会したのは、田舎暮らしを始めた翌年です。淡竹を手に裏山を下る途中、顔を上げると我が家の屋根のてっぺんで、誇らしげに、その花は咲いていました。

「あれはなぁ、この辺では鳶尾ちゅうてな、魔除けや」

乾燥に強いので、茅葺き屋根に根を張り大風から守るのだと教えて頂きました。

花菖蒲やかきつばたほどメジャーでない花、妖しげに誇らしげに咲くこの花の種を、私は心の中にしまっておきました。そして今年、穀雨の頃、この種を蒔いたのです。諸先生方から頂いた肥料を施し、時に、葉をばっさり切り落とし育てました。

花は咲くだろうか……。待ちに待った知らせが届きました。一初の花は、五十嵐先生はじめ、銀華文学賞選考委員の先生方、河林先生のご遺族の方々の手で咲かせて頂きました。

有難うございます。

河林先生のご著書を読ませて頂いた私は、読後「心の葛藤と向き合う覚悟の種」を握りしめていました。これからは、この種を播き続けたいと、切に思っております。

未熟な私を、ご指導下さいました諸先生方には、心より感謝いたしております。

このたびは、本当に有難うございました。

皆笹 麻希江

みなささ　まきえ

大阪市阿に生まれる。専門学校卒業後、生花店勤務

京都府美山町にＩターンし、夫と自然農法を始める。

父が亡くなり米寿の母が暮らす大阪と美山町を行ったり来たりの日々を送る。

2009　心斎橋大学（藤本義一総長）文章ドラマコース普通科入学

2010　心斎橋大学専門科 小説・エッセイコース進級

2011　心斎橋大学専門科修了

修了作品 優秀賞受賞

現在、心斎橋大学大学院 小説・エッセイコース在学中

難波利三先生、丹波元先生にご指導を頂いている。

淡雪――実朝の死――

北風嘉己（よしみ）

一

この日大江広元は尼御台政子に呼ばれて北条の邸を訪れた。長身の広元は例によって背をまっすぐに、直垂（ひたたれ）の裾を引きずるようにして黒光りのする長い廊下を歩いた。

部屋に入ると正面に政子が座しており、その横に実弟の幕府執権、北条義時がいた。

「こたびの騒動では、そなたたちの努力により無事収束できました」

政子は切れ長の目を和らげて広元をねぎらった。今年で五十六才になる政子はすでに落飾していて頭を白絹で被布し、鮮やかな濃紫の法衣をまとっている。色白の頬は豊かで、当時の色香ほのめく美しさをかすかに残している。

広元は黙って頭を下げた。先日の和田義盛による謀反騒ぎのことを言っているのだろう。この謀反には和田の親族である三浦氏の領袖、三浦義村という大物が加担するのではないかとの噂が出て幕府軍を緊張させたものだった。三浦一族は鎌倉屈指の有力御家人として府内に勢力をはっていて、これまでにも何かと反北条勢力に反応しては権力を狙ってきた経緯がある。広元は幕府宿老として同役の三善善信らと共にこの鎌倉で内乱が大きくならぬようとにかく三浦氏の和田への加担を思い止まるよう説得に奔走した。その結果、幸いにも三浦が土壇場になって加担を見合わせたことから何とか幕府軍は反乱軍を鎮圧することができたのだった。

広元が頭を上げると、横から義時が

「ところで広元は府内で今、三浦の犬は友を喰う、などと囁かれているのをご存じか」

と、どこか三浦氏に対する蔑みの笑みを浮かべながら問いかけてきた。

「……いえ」

広元はその知的な義時の顔を見つめた。

このたびは親族の和田義盛を裏切ってまで幕府方の北条に味方した三浦義村なのに、義時のこの言葉は恩を感じるどころか依然として彼らに心を許していないところをかいま見せていた。鎌倉の二大勢力であるこの北条と三浦は表面上融和をはかっているが過去のさまざまな行動からして本音のところは鋭く敵対していてお互い隙をうかがい合っていることは明白なのだ。才子と評の高い三浦義村は今回のことは周囲の情勢からして和田に不利と判断し、やむなく北条になびいて和田を切り捨てたのだろう。広元が人づてに聞くところによると義村は潜在的に今の北条の力を恐れていてその勢力の衰える時期を待っている。義村のひそかな野心はもっと先を見据えているという。義村の妻は先年北条の手によって暗殺した前の将軍、源頼家の子善哉（後の公暁）の乳母である。一説では義村はそのあたりに狙いを定め、今や北条の手中にある現将軍、源実朝（頼家の実弟）を亡き者にしてこの善哉を将軍に据えようとの魂胆が見えると言う。これを聞いた時、広元は権力欲に対する人間の底知れぬ恐ろしさにふと背筋が寒くなったものである。

「本日そなたに来てもらったのはほかでもない。実は御所（実朝）のことだがの……」

政子の言葉に広元は再び彼女の方に向き直った。

「御所は今回の和田の乱で斬首が決まった謀反人の一人、渋河兼守を突然赦免せよと仰せになられてな、周囲をあわてさせているのじゃ」

政子は駄々をこねる幼な子に手を焼くかのような表情をした。こんな顔は外では絶対に見せない。政子は二代将軍頼家、現三代将軍実朝の実母である。人々から敬われた故頼朝の正室として、また東国全土を統率する二人の将軍を生み育てた御母として、政子は今もって多くの御家人衆から慕われているのだ。政子の責任は重い。気丈な彼女はこれまでにも鎌倉を思い、北条を思って山積するさまざまな困難に対処してきている。

「そのことは聞いております」

広元がそう答えると

「されば、そなたからなぜその者を赦免するのか真意を聞いてほしいのじゃ。御所はそなただけには心を許しているでな……」

政子は口に笑みを見せた。義時も黙ってこっちを見ている。突然そんなことを言い出した実朝の真意だけは知っておかねばならぬのだろう。案外何かと実朝を持ち上げて懐

柔を図っている都からの指令かもしれない。
「相分かり申した」
広元は短く答えた。
（はて、また御所のお心を探るお役目か……）
吐息まじりにふと庭に目を移すと、六月の色鮮やかな花々が今を盛りと咲き乱れていた。
北条邸を辞した後、広元はそのまま自宅にもどるとゆっくりと身を休めた。開け放たれた部屋は家人の姿も見えず、嘘のように静まり返っていた。爽やかな夏の風がいろんな花の香りをつれて室内を通りぬける。広元は脇息に寄りかかるとじっと目を閉じた。細烏帽子（ほそえぼし）を目深に濃茶の直垂（ひたたれ）である。浅黒の中の眉間の皺は深いが六十五才という実年令よりも少し若く見える。痩身でいつも背をまっすぐに正し、刹那の表情にどこか知的な愁いを見せるところなどは典型的な能吏の印象を人に与える。広元は式部小輔大江惟光の子として都に生まれ、十六年間宮中政務の外記として文筆の職についた。その後頼朝に乞われて三十六才で鎌倉にやってきた。以来この頼朝に信頼され、草創期の幕政に関わった。彼は大裏や院庁に精通していたため主に都との交渉でその知識を生かし、公文所の別当などを歴任した。
（……まだまだ楽隠居はできぬようだな）
広元は目を開け、脇息から身を起こすと一人つぶやいた。広元の脳裏に都の奥深くにおわす本院（後鳥羽上皇）の妖しい顔が浮かんでくる。広元は危惧している。もともと京都と鎌倉の公武関係は在地の支配権などをめぐって根本的に矛盾が生じていて、双方は常に利害のともなった軋轢の連続なのである。それなのにこの狭い鎌倉の中は今、御家人どうし権力をめぐって陰謀の渦が巻き、ひきもきらず内紛が繰り返されている。都の方角からはそんな混乱を歓迎するかのようにこの地に向けて不気味な目を光らせているのだ。だからこの鎌倉を内乱などで混乱させることだけは絶対避けなければならないと思っている。本院の院政政権は確実に倒幕計画を進めていることは明白であり、こんなことが都にとって格好の材料となるからだ。このところ本院は実朝と歌などを通して交流を密にし、表面上は幕府との関係を良いものに装っているが、その怖ろしい本心が見えるだけに油断がならないのだ。自分がこの齢になっても幕府宿老として北条のために尽力しているのは主君頼朝の遺志を重んじるからにほかならない。源家の後継を維持し、鎌倉幕府を守り、繁栄させてゆくにはこの北条家がしっかりと将軍を守護してもらわねばと考えるからである。幸い現執権の義時は切れ者の評も高く、若い実朝を見守ってくれている。これからの鎌倉の安定のためにはこの北条の力が盤石でなければならないのだ。
ふと物思いから我に返ると、いつのまにか陽が沈みかけていて部屋内を通る風が少し強くなっていた。

二

実朝は御所内の中坪でひとり蹴鞠に熱中していた。誰もいないところでただ一人、ひたすら鞠を蹴っている。二十一才のこの若者は父、頼朝に似て色白である。
広元は邪魔をせぬようそっと縁に正座すると黙ってその動作を眺めた。鞠は巧妙に実朝の足に操られ、蹴るごとに鈍い音を発して一定の旋律で空に舞い上がった。近習が湯の入った茶碗を広元の前に置き、音もなく引き下がっていった。やがて広元に気づいた実朝は鞠を供に渡すとゆっくり広元の横に並んで座った。
「お上手になられましたな」
広元は少し口をほころばせながら言った。
実朝は例の伏し目がちの顔を和らげて無言でいた。立烏帽子に藍の直衣（のうし）である。
「お歌集の方はいかが、進んでおられましょうか」
「そう、もう少しで完成する」
実朝の目が一瞬輝いたように見えた。彼は今自分の歌集作成に取り組んでいる。歌はこの人の生活の一部である。孤独で淋しい日々を過ごすこの人にとって歌は唯一の慰めなのだろう。実朝は十四才の時に作歌を始めて以来それに熱中し、十八才の時中世最高の歌人と言われた藤原定家に師事し、その才能を開花させた。定家は実朝に詠歌の技術を口伝し、自分の歌集や相伝の万葉集をも贈っている。ちなみに実朝のこの歌集、金槐和歌集（一巻七百首）は清新な感覚と陰影に富んだ若者の心を伝えた秀歌集として後世に名高い。
「ところで……」
広元は話題を変えた。
「御所には先の和田の騒乱に加わった謀反人の一人を赦免せよと仰せられたよし……」
「左様」
「なぜその者を赦せと?」
「……」
実朝はその白い顔をそむけるように無言でいる。広元は黙って実朝の返事を待った。
人はこの人のことを子供の心そのまま持って成人なされたとか、単純で利用するに最適の人とか、陰口をたたくが、広元はそうは思っていない。この若者の実像はとても利発なのだ。実朝は建仁三年（一二〇三）九月、十一才で征夷大将軍となり、兄の頼家に代わって幕府を継いだ。それ以来この人は執権の義時ら北条でがっちりと守られ、さらに安達景盛など親派の御家人たちから忠誠を尽くされて守護されている。ただ政務は義時がすべて行い、自分の意思など入る隙間もない。その上この人のまわりには常に政子はじめ乳母の阿波ノ局、さらに十三才の時に婚儀をかわした

御台所とその乳母右京ノ局など女たちで取り巻かれ、動きのならぬ環境下にある。子に恵まれない実朝は早くも自分の後継をめぐって鎌倉が揺れていることも知っている。彼はそのはざまにある自分の立場をよく理解しているのだ。自分が動けばどこかに亀裂が生じ、乱が起る。人は争い、死に、平和は遠くなる。それならいっそ自分の意思を捨て、人々の言いなりになっていることにこそ世のためになると考えているのだ。実朝は――何事もよろしいように――と言うのが口癖である。幕閣や女たちに対しても同じである。彼はいつも周囲の人たちの中にあってぬるま湯に浸るように埋もれ、人々の言葉を黙って受ける。それが将軍として一番良い処し方であると思うからなのだろう。広元はこの若い将軍の孤立と苦悩の深さを汲み取っている。彼が歌におぼれ、蹴鞠や管弦に熱中し、自分の心を慰めているのが痛々しいほど分かるのである。しかしこの人は時たま胸に抑えたものを一気に吐き出すかのように突飛なことを言い出したり、行動したりして周囲を困惑させる。その時はきっとお飾り将軍としての自分の誇りや鬱積が突如として頭をもたげる瞬間なのかもしれない。

ややあって沈黙を破るように実朝の口から言葉が出た。

「幕府はあの渋河兼守を謀反人としているが、この者は死に臨んで自分の潔白を歌によせて神に誓っているのだ。このような純粋な心を持つ者をむやみに断罪してはならぬ」

実朝の口調は毅然としていて、何人も自分の意思を覆させない決意にあふれていた。

この渋河という者、多少歌のたしなみがあるらしく、獄舎から歌を詠んで使者に持たせ、実朝の目に触れるよう御所に近い荏柄天神の社前に捧げたらしい。実朝の優しさと、歌に造詣の深いところにつけこんだしたたかな行動であることは明白だった。

「都ではこのような雅な者を決して罪人にはさせぬもの。広元も少しは京風の優雅な心を学んではどうか」

叱るような口調だった。広元は畏まって頭を下げながら、このことは都からの指令などではなく単なる実朝個人の感情から発せられたことを知って安心した。きっと政子も義時もそれを知ってほっとすることだろう。実朝は以前から京都の文化や都人の典雅な生活に異常なまでに憧れを見せている。従ってこの人は鎌倉でただ一人の都人と言っていい。

やがて実朝は部屋に上がると文机の前に座り、散乱している巻紙や短冊の整理に取りかかった。広元がこれを見てそっと退出しかかると

「……もう行くのか」

実朝は背中のまま言った。

「はい、お邪魔ゆえまた参りまする」

「かまわぬ、ゆっくりせよ。ところでその後、腰の痛みは

どうか」

意外な言葉が飛んできた。

「はい、齢のせいか一向に癒えませぬ」

恐縮してそう答えると

「近々、都から良い薬種が届く。待っていよ」

若々しい凛とした声だった。

「なんと、もったいなき仰せにござる」

広元は自分に対するこの人の心優しい言葉に感激してその場に平伏した。

まもなく実朝の前を辞すと広元は例によってまっすぐに背を正し、表門に通じる廊下を渡った。広く瀟洒な御所内は意外に人の姿は少なく、がらんと静まり返っていた。

「大江どの……」

その時背後で高音の華やいだ声がした。実朝の乳母、阿波ノ局だった。

「久しぶりに香でも聞いてゆかぬか」

阿波はそう言って自室に誘った。いつものように明るい笑顔である。彼女は政子の実妹で三つ下である。姉政子の強く聡い表情とは違っていつも陽気で屈託のない笑顔で人に対する。だがこれがこの人の怖ろしいところであることを広元は知っている。

阿波は長い垂髪を揺らせ、緋牡丹模様の鮮やかな被衣（うちぎ）のまま香木を焚いた香器を広元の前に置いた。室内に不思議な香りが漂いはじめ、どこか妖しい空気が流れた。

「大江どのは尼御台から何か聞いておられるか」

「何か、とは？」

広元は香器を掌中に包むようにして胸元まで上げた。

「後継のことじゃ。そなたは尼御台の信任が厚いゆえ何か相談を受けているかと思うてな」

彼女はこのような重い話題でも愛想のよい笑顔を浮かべている。

「それがしがそのような大そうな問題に関わられるはずがありませぬ」

広元はこう返事をしてその怖い笑顔に相対した。

この阿波ノ局は実朝出生と同時に乳母となり、今日まで養育してきた。乳母とは御母とも呼ばれ、その子とは実の母をしのぐほど絆が深い。そしてその子の運命が開けるか、埋もれるかは乳母の男社会に対する実力しだいとも言われている。阿波はふだんのその振る舞いからは想像のできぬほどの凄腕だった。まず彼女は夫の阿野全成を使って将軍頼家を退ける陰謀を企て、父北条時政や兄義時の応援を得てまんまと実朝を念願の三代将軍に据えた。これを実現させるため比企一族を滅ぼしたり、頼家の後見人であったあの梶原景時の追い落としにも手を染めている。その後彼女は将軍にもっとも近い地位にあることを利用して男たちを

自在に操り、実父時政と継母牧ノ方の騒動の時などは二人一緒に伊豆に追放するなどいろいろ血なまぐさい事件に携わってきている。鎌倉の女たちの争いも男たちに負けず劣らず壮絶なのだ。

阿波は相変わらず人の良さそうな笑顔で自分を見つめている。

（北条の血だな……）

広元はそう思った。この笑顔で男たちを震え上がらせているのだ。

「尼御台は次期将軍に前将軍頼家の遺児、善哉をあてようと考えているふしがあるのだが、そなたはこれをどう思うかの」

探りを入れているのがよく分かった。

「何とも初耳でござれば……」

「ほほほ……左様か。それならばもう聞くまい」

阿波は口もとに手をあて、あでやかに笑った。自分を見透かしているような笑いだった。

「善哉の次期将軍は三浦義村も狙っているようじゃ。何にしろ善哉にとって北条は父の仇なのじゃ。われらに恨みを持つそのような者を後継にしては北条はどうなる。姉上は何を考えているやら分からぬ！」

阿波はさすがに表情を曇らせた。

まだ若い実朝の後継問題をなぜ今から周囲が取り沙汰せねばならぬのか、しかしそれが鎌倉なのだと広元は思い直さねばならなかった。今の鎌倉は権力を欲しがる集団が入り乱れ、権謀術策の渦にある。だから謀反などという重い言葉が事につけ日常茶飯事のように人々の口にのぼる。北条家としては御家人たちに対する統制が脆弱なのを知っているだけに今から実朝の後継を決めておかねばならぬ事情があるのだろう。さもなくば内紛どころかこの地で大乱になる可能性も否定できないのである。

（御所にお子さえあれば……）

広元はそう思いながら阿波ノ局の前を辞し、御所を後にした。

三

実朝が権中納言に昇進したのは二十四才になった建保四年の三月であった。過去十七才のときに従三位を受け、二十一才で正二位となって以来三年ぶりの昇進である。これを聞いた時の実朝の喜びは大きく、彼は宮中にむけて丁重に礼を述べると同時に本院を敬う気持に変わりないことを伝え、今後ますます忠誠をつくすことを誓っている。

山はさけ　海はあれなん世なりとも
君に二心われあらめやも

実朝の本院を慕う心はこの著名な歌にも表れている。

昇進拝賀式典の日、広元は鶴岡八幡宮境内の石段沿いに参列した。実朝は黒絹の束帯に身を包み、義時以下多くの幕臣たちを従えて晴れやかに神殿に向かって長い石段を昇ってきた。折からの春風に桜の花びらがその肩に舞ってそれは美しい行列であった。早いものであの蹴鞠に熱中していたころにくらべると一段と大人びていて、うっすらと口髭をたくわえるまでに成長していた。やがて実朝は目ざとく広元の姿を見つけるとふいに表情を和らげ、そっと目くばせしてきた。広元はとっさのことに戸惑い、あわてて周囲の人に気づかれぬようそっと目礼を返した。

行列はしずしずと通過した。広元はその姿を追いながら考えた。都におわす本院はいまだにこの実朝の素直で純粋な性向を利用しようとしている。本院の真意は高い官位を与え、実朝の気持を都に引き寄せることで鎌倉を制御しようとしていることをあらためて思った。この危惧は幾度重ねても広元の胸から拭いきれるものではなかった。

実朝がまたしても突飛な行動を起こし、周囲を驚かせたのはこの権中納言に昇進した一年後のことだった。それは府内の和賀江島港に突然大がかりな足場を組んで何やら得体の知れぬ構造物が製作されはじめたからである。

和賀江島は鎌倉市内の南、材木座海岸の東端に位置している。ここは累々と石積みされた港湾施設で、内外の多くの舟が出入りし、停泊している。従ってこの一帯は商業港湾施設として多くの商工業者が住みつき、大町、小町、魚町、米町など下町の繁華な家並みが続いている場所である。ちなみに鎌倉は鶴岡八幡宮を中心に何本もの幹線道路を走らせて都市を形成しており、政庁や寺院、有力御家人の居館は御所を囲むように山手の谷間に建ち並んでいる。なお北条家は代々北方の山ノ内郷にその居館を構えている。いずれにしても武士たちはその住まいを高台から谷間まで雛壇のように建て並べていて、土地が狭い分密集度は相当に高かったものと想像できる。

この和賀江島に朱色鮮やかな唐船が完成したのは建保五年（一二一七）五月のことだった。町衆は突如姿を現したこの大船に群がり、仰天した。

「将軍さまがこの船で宋國へ渡られるそうな」

「何とまあ、大そうなことじゃ」

人々はそう口々に囃した。

実朝が事もあろうに育王山参拝のためこの船で宋國へ渡航すると言い出したのだ。噂によるとなんでも仏教に信仰が深い実朝が、仏殿建造の技術者として来日している宋人の陳和卿なる人物に会った際、この人の前世が宋國の医王山の長老であったことを聞かされていたく感激し、この陳なる者に船を造らせて渡航を企てているとのことなのだ。

「御所がまた、異なことを言い出されたな」
部屋に入ってくるなり同役の三善善信が困りはてた顔をして前に座った。七十三才のこの善信は今は亡き頼朝の信が厚く、二十八年前の幕府創立の際には問注所の初代別当（長官）を務めた人物である。広元は急な善信の来訪に執務を中断し
「唐船のことであろう」
と落ち着いた表情で向き直った。
「将軍が自ら宋國へ赴くなど、前代未聞のことである。執権や尼御台はもちろん、幕府の重臣や阿波の諫止などにも頑として耳を傾けないご様子とか……」
「公式にはご自身が渡航するとは言っていない。そう騒ぎ立てることはないと思うが……」
広元は平然としていた。あの実朝が本気でそのような暴挙を実行するはずがない。
「そう悠長なことも言ってもおれまい。とても容認できることではない」
善信の吐息がこちらの胸の奥まで聞こえてくるほどだった。
（……明日にでもお会いしてみよう）
この時広元はそう思った。実朝とはあの八幡宮での昇進拝賀の式典以来逢っていない。
「それともう一つ、御所は最近都に向けてさらなる官位の昇進を要望なされているらしい」
善信の表情は和らぐ間もなかった。
そのことも聞いている。広元にとってこちらの方がよっぽど気がかりだった。何でも最近異常なまでに官位に執着しはじめ、本院に向けて大納言はおろか右大臣の位を強く要望しているらしい。
「いやはや困ったものじゃ。いつもながらのことでござるが……」
広元はこの善信の言葉には反応せず、聞き洩らしたふりをして執務を再開した。

翌日、広元は意を決して御所を訪れた。
実朝は文机に向かって膨大な仏教に関する書物や、彼がもっとも信奉する聖徳太子にまつわる古書などの整理に没頭していた。この日の実朝は立烏帽子を目深に、清楚な水色の狩衣である。
「先日御所より賜わった薬草がよく効いて、腰の痛みがずいぶんと和らぎました」
広元はまず平伏し、先日届いた薬の礼を述べ、深々と頭を垂れた。
「それは重畳」
実朝は機嫌よく広元を身近に招いた。そして都育ちの広元を相手に、隠れた京都の名刹とか名所、都に咲く季節の

花々のことを尋ねるなどして時が過ぎた。
「ところで御所……」
話が一段落して広元は何気ない口調できり出した。
「建造なされた唐船のことで、執権や尼御台がいたく心を痛めておられるようですが、まさか本気で渡航などとは……」
これを聞いた実朝はしばし横を向いてうそぶくように冷笑していたが
「義時はじめ母御や阿波は、われの心の内など分かってはおらぬ。少し驚かせただけでこのような騒ぎを起こしよる。だいたい、われが本気で異国へなど渡ると思うか」
と憮然とした表情で言った。
「そうでございましょうとも！」
広元はつい嬉しさで大声になった。自分の思ったとおりだった。
「それで、あのお船には誰が乗るのですか」
さりげなく聞いてみた。
「近侍の葛山景倫を乗せ、かの地から仏舎利を持ち帰らせるのだ」
仏舎利を求めるのは釈迦に深く心酔するこの人の夢なのだろう。
「左様ですか」
遠国から仏舎利を持ち帰るなど実際にはとても困難なことである。それをいとも簡単に実現するものだと決めてしまうところがこの人の危うさを人に感じさせるのだと思った。
「参られませ」
その時、杉戸が開いて御台が入ってきた。病弱のその顔は白磁のように清らかで、まるで人形を見るようだった。背後には御台の乳母右京ノ局が監視するようにひかえている。この右京は都からの指令で幕府の動静を逐一報告しているとの声もある。
「お健やかにございますか」
広元が御台に声をかけると
「はい、このところ気候がよろしいゆえ……」
と、いかにも深窓の姫育ちらしい抑えた涼やかな声で答えた。彼女は藤原氏北家、関白道隆の流れを汲む坊門家の姫である。正室なれど病弱であるがゆえ、子には恵まれていない。
御台が奥にさがって再び二人が黙然と向き合った時、実朝がぽつりと
「……源氏はわれで途絶えるかもしれぬ」
と意外なことを口にした。広元は仰天して
「何を仰せられます、お若き御所の言葉とは思えませぬ。武士の棟梁としてこれからも全土を統べ給うのはあくまで源氏の血を有する者のみにござりまする」

と必死になって説いた。

「そんな立場にあるわれはいまだ子さえ成せぬのだ。兄の子善哉がいるが、あの者では源氏は継げぬ。賜姓皇族であるわが源氏は後世にその名を残さねばならぬのに……」

実朝の目は沈んでいた。広元が黙っていると

「……われは右大臣の位が欲しい」

低い声で言った。

実朝が最近さらなる高い官位を望まれ、執拗に宮中に働きかけているのを知っている。広元はそれがなぜなのかも知っている。この人は名家源氏のことをいつも考えているのだ。だから源氏の血が自分の代で途切れたとしたならば、せめてその名跡を己の代でいっそう高めておきたい一心でおられるのだ。そんな気持でいる実朝を責めたり諌止したりする気持にはいまとてもなれない。

「それよりもともかく、源氏の血を残すことです」

声をひそめて言った。御台の腹でなくとも構わない。要は実朝の血が欲しいのだ。

広元は横でただじっとうつむいたままでいる実朝を見ながら

（今日はこれ以上何も申し上げまい）

そう思った。

空が茜色に変わっていた。

またしても実朝の夢が砕かれたのはそれからひと月ほどたってからのことだった。

折角完成した唐船がいざ進水にあたった時、予定よりその重力が大きすぎて海面に進水することができず、見事な失敗に終わってしまったのである。設計に当たった宋国の技術者陳和卿なる者はこの失態に人目を避けるようにそそくさと帰国したという。この宋人、どこか怪しく、いかがわしい人物であったに相違ない。

四

都から特使が遣わされて実朝待望の右大臣昇進が告げられたのはこのことからおよそ一年後のことだった。

翌日のこの件に関する幕府評定は長かった。やっと終って広元が大勢の評定衆にまじって広間を出、小休止すべく脇部屋に入った時、そこに先ほどまで一緒だったあの三浦義村がたった一人で湯を飲んでいた。

「これは大江どの、お疲れでござった」

執権、北条義時でさえ一目置いているこの義村は五十を過ぎたくらいか、頬から顎にかけて見事な髭をたくわえた精悍な風貌をこちらに向けていた。往年の坂東武者そのものの雰囲気を漂わせる人である。三浦氏は頼朝の時世には御家人の中でも最も頼りにされた一族で、その信頼は絶大だった。また義村は政子の信が厚く、今も表向きから身内

の難題にいたるまで何かと相談を受けていると聞く。だが依然腹の底では何を考えているか分からぬ、怖い人であることは確かだった。

「官打だよ」

義村は広元が座るのを待つようにいきなり言った。

「本院は御所のたっての要望を聞き入れて、このたび右大臣の位を授けられた。御所ご本人の喜びは大きいが、われわれはこれを素直に喜ぶわけには参らぬ」

広元は義村のこの言葉の意味がよく理解できた。これまでにも本院は実朝を介して朝幕の融和を進めてきているが、しかしその陰で実朝を利用して鎌倉の権益を冒してきていることも事実なのである。義村の言う官打とは官位の等級が分不相応に高くなり過ぎ、本人の負担が増してかえって不幸な目にあうよう仕向けることをいう。従って今回は実朝の望む高い官位を与えて周囲の妬みを誘発し、鎌倉の混乱を増大させようとのねらいが見えるのである。

「用心せねばなりませぬな」

広元が同意を表わすと義村はなおも言った。

「都では御所のことをこう陰口を叩いているらしい。鎌倉の将軍は愚かにも用心がなく、ただぬくぬくと歌づくりに熱中している。ゆえにこの人は右大臣の位にふさわしくなく、多分に荷が重すぎよう、とな」

広元は今さらながら都人たちの陰謀に怒りを覚えた。本院は実朝を都人として認めてはおらず、いかに異国人として軽蔑しているかを思い知らされる。そればかりか実朝を利用した具体的な倒幕計画がすでに出来上がっているとの声もあるくらいだ。それなのにこんな世の垢も知らず、純粋に都に敬愛の意をつくす実朝に憐れみが増すばかりである。

「鎌倉が窮地に立たされぬよう幕府も充分配慮致しますれば、三浦どのにも何卒ご尽力下さるようお願い申し上げます」

広元は義村に向かって丁寧に頭を下げた。この人の合力はやはり力強さを感じるからだ。

「その後、お体の具合は如何かの」

政子がまっすぐに目を向けてきた。

「はい、この齢になればこんなものでございましょう」

広元は笑顔で答えた。自分より九つ下の政子は毅然とした中にまだ女の華やかさをのぞかせる。夫頼朝の死後これまで鎌倉を背負って数知れぬ修羅場をくぐってきただけでなく、一人の女として幾多の悲しみを経てきている。過去に長男頼家を政治的見地から死なせることをやむなくされ、さらに長女大姫、二女三幡の愛する二人の娘も病で亡くしている。政子が頼家の子、善哉を深く愛するのはそんな淋しさの表れなのだろう。だがこの善哉の素行の悪さは定評

があり、政子を大いに悩ましているところなのだ。

今日はその善哉が政子念願の鶴岡八幡宮の別当に晴れて就任することが決まったため、広元が書類を邸に持参したところである。

丁度この時、杉戸が開いて一人の黒衣を召した僧形の若者が入ってきた。

「善哉です。大きくなったでしょう。今は名を公暁と改めました」

政子が横に座った若者の顔を見ながら紹介した。

「お久しぶりにございます。しばらく見ぬあいだにご立派になられましたな」

広元がそう言葉をかけると公暁は額の突き出た丸坊主の頭を光らせたまま無愛想に会釈した。彼の眼は暗く、深沈としていた。肉の薄い青白い顔は神経が透けて見えるほどの鋭さを人に与えてくる。今年で十七才になる公暁は乳母が三浦義村の妻である関係で今は三浦の邸に居ることが多い。

広元はこの若者の父頼家のことを思った。事実、二代将軍頼家の所業は頼朝の嫡子とはとても思えぬほどひどかった。これまで幕府を支えてきた重臣たちを寄せ付けず、年若い近習たちと屯しては独断専行の勝手な政治をした。目に余るその所業は幕府の危機を呼び、北条はやむなく頼家暗殺を実行し、弟の実朝を三代将軍に据えたのだった。聞くところによると暗殺のその日、頼家の配所先である修善寺に突然屈強な黒装束数人が寝所に乱入し、無言で頼家を四方から突き刺したという。頼家は苦しい息の下から

（北条の者か……）

とつぶやいたという。自分にも歴とした母方の北条の血が流れているというに、なぜその者たちに討たれねばならぬのか。この若者はきっと権力欲の犠牲となった自分の運命に怒りと悲しみを抱えたまま二十二年間の生涯を閉じたのだと思う。

公暁は政子の横で壁に寄りかかったまま足を放り投げている。

政子は公暁の乱れた黒衣の裾を直しながら

「よいか公暁、そなたは近々鶴岡八幡宮の別当という名誉ある職に就かれるのじゃ。これからはその名に恥じぬよう、いっそうの努力と精進を怠らぬようにな」

そんな言葉にも憮然とした表情でいる公暁に、広元はつい

「おそれながら鶴岡八幡宮は鎌倉幕府の政治的守護神にございます。その別当といえば代々将軍に勝るとも劣らぬ格式にござれば、何卒尼御台のご期待に報いられますよう」

と諭した。ちなみに八幡宮は鎌倉の北方、小林郷北山に位置している。ここの別当は宮全体を統括し、責任のもと諸職のすべてを補任しなければならない。

「分かっている！」

公暁は煩わしそうにそう返事をすると蹴るように部屋を出ていった。

「……まあ」

政子はそんな公暁の態度に気恥ずかしそうに笑いでその場を繕った。

広元はこの公暁の様子に何か不吉なものを感じた。彼の中には思いのほか北条や実朝に対する恨みが強く渦巻いているようだ。そしてそれを助長するかのようにあの三浦義村が彼の耳もとに口を寄せ、何やら不気味な囁きを洩らしているそんな光景を想像した。

五

実朝の右大臣昇任拝賀の式典は承久元年（一二一九）正月二十七日酉の刻、鶴岡八幡宮でとり行われた。この日の鎌倉は珍しく朝から大片の雪が降り続き、柴垣や松の梢を純白に彩ってその美しさは道行く人の足をしばし止めるほどだった。

出立に先立ち、実朝は冠に飾り太刀も美々しい純黒の束帯姿で、政子や阿波、御台、右京などの女たちの前に立った。彼女たちはその晴れの姿に感無量の面持ちで見入り、

「おめでとうございます」「凛々しいお姿でございますよ」

などと口ぐちに言いながら惚れぼれと眺めた。行列は雪の中、暮れなずむ参道をしずしずと進んだ。この列には都から坊門忠信など多くの公卿も参列しており、義時や幕臣たちを従えた晴れやかな長い列はどこまでも続いた。本殿での式典が終った時はすでに辺りは闇に包まれていて石段の両側に並んだ大篝火がキシキシと音をたてて仄めいていた。依然として雪は降り続いていて石段に落ちては淡く透明に近い薄雪となって積み上がった。先頭の実朝はほの暗い中、後続から少し離れてその石段をゆっくりと下りていった。その時だった。黒く聳え立つ右横の銀杏の大樹が一刹の風に揺れたかに思えた瞬間、一つの影が実朝に向けて脱兎のごとく襲いかかったのである。雪明りにキラと刃の光るのが見え、二つの体はもつれあって石段を転げた。とっさのことで周囲は声も出ず、一瞬すくんだように身を硬直させるだけで誰ひとり声を発する者はいなかった。気がつくと雪が鮮やかな鮮血に染まっていた。

「御所！」

周囲がやっと我に返って叫んだ時、刺客はすでに実朝の首級をかかえて鼠のように走り去っていた。行列は一挙に乱れた。中ほどにいた広元は最初何が起きたか分からなかったが、前の方から警護の武者たちが

「何たること！　何たること！」

「御所が！　御所が！」

と血相変えて行き来するのを見てはじめて変事と分かり、

夢中で人を押しのけて前方に走った。足が歯がゆいほど前に進まなかった。気がついてみると目の前に実朝の上半身が鮮血に染まって雪中に埋もれていた。広元はその場に佇んだ。幻を見ているようだった。これは夢なのだ、夢を見ているのだとただひたすら自分に言い聞かせた。体ががたがたと震えてきた。

実朝君ご落命――の報は御所内を揺るがせた。政子や阿波たちはその変わり果てた姿を前に抱き合いながら狂乱せんばかりに泣きわめき、取り乱した。すでに犯人は公暁であるとの報が入っていた。聞くところによると、その時公暁は実朝の腹部を刺しながら

（親の仇はかく討つものぞ！）

と口走ったという。父を殺され、将軍後継の道を断たれた彼はこの夜の実朝の晴れ姿に嫉妬が燃え上がり逆上したのだろう。この凶行は彼の抑えに抑えきれぬ怨念の噴出で衝動的なものであったらしい。そしてこの思いもよらぬ短絡的な公暁の行動に一番あわてたのはほかならぬ三浦義村であったろう。日ごろから公暁に対する実朝殺害教唆のことは知られるところだが、こんな無計画で突飛な凶行に驚愕した義村の、その後にとった行動は素早かった。彼はすぐに手の者に命じ、実朝の首級をかかえて自分の邸に向かってくる公暁を途中で一言も喋らすことなく斬殺させると、いち早く幕府に対し下手人を始末しましたと報告し、自ら公暁の死体を持参したのである。義村が己の潔白を取りつくろうためにはこの公暁の口封じしか残っていなかったのだろう。

意外なこの義村の行動は義時を悩ませた。義時ら幕府はもはや義村の謀反は明らかであるとして三浦邸襲撃に向けて幕府軍八千を発進しようとしている矢先のことだった。

だが結局、その後の幕府のとった結論は早々に犯人を討ち果たした義村の功を評価する形をとり、三浦一族に対する謀反の疑いを中止した。三浦と戦えばまた鎌倉は火の海となり、幕府の損傷は大きくなる。都からの妖しい目もある。悔しいがそんな愚を避けるため、北条や幕府の利益を考えた義時の砂を噛む思いの処置だったのだろう。

この事件の後広元は家の者とも口を利かず、何日も自室にこもって呆然と時を過ごした。悲しみはいつまでも去ってゆかなかった。その淋しさは年寄りには過酷だった。

葬儀はこの日鎌倉の北西に位置する寺院で盛大に行われた。都からも多くの高僧や宮人、公卿たちが参列し、会葬者の数は回廊から外にまであふれた。

広元は三善善信と並んで正面の祭壇近くに座した。すぐ前に悲しみにくれる政子や阿波、御台の打ちひしがれた姿があり、横に北条義時やその子泰時、そのほか幕閣、御家人衆歴々の顔が見える。そして近くの席には三浦義村夫妻

の神妙な顔もあった。

広元は香のたなびきと読経の中、これまでの輝ける源氏の軌跡を追った。先祖に未開地に進軍して土着の豪族を平定した源頼義や八幡太郎義家をいただき、下っては武士ではじめて殿上人となった相模の源義朝、そして平家と戦った源三位頼政、木曾義仲、九郎義経などの武将たち、ひいては全平家を西海に追って滅亡させると鎌倉幕府を創立し、全土を支配した頼朝まで源氏を継承する勇者たちの活躍が今も世にその名を轟かしているのだ。

読経の大合唱の中、鐘の音が大きく響いた。広元はそっと目を閉じた。

あの時実朝君はしみじみ言っていた。

（源氏の正統は断絶するからせめて家名を上げておきたい。右大臣は源家歴代の官位としては最高の位である。これで源氏の名は世にいっそう輝きを増して残るだろう。これが自分のできる精一杯の務めなのだ）

人々は、ただの都の憧れ人とか、異常なまで本院を敬っているとか、仏教にのめりこんでいるとか、ぬくぬくと歌づくりに熱中しているとか、利用するに最適な人とかいろいろ陰口を言うが、彼は実のところそんなことより誇り高きわが源家のこれから先のことを一心に思い、確実に悩んでいたのだ。

思えばこの人の生涯はあの日の淡雪のような生涯だったような気がする。どこか危うくて、繊細で、そして清冽な一生だった。

「これで……源氏が途絶えたな」

横で善信がぽつりと言った。

「……名が残る」

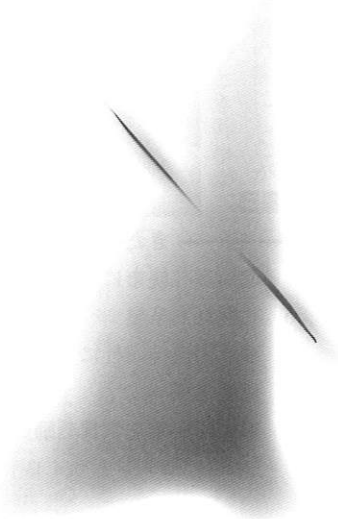
広元は祭壇の――右大臣源朝臣実朝卿――の文字に目をやりながらつぶやいた。

焼香の順番がまわってきたのか自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

（利発な人なのだ）

広元は中央の祭壇に向けてゆっくり立ち上がった。

涙がひとすじ、また頬を伝うのが分かった。



受賞の言葉

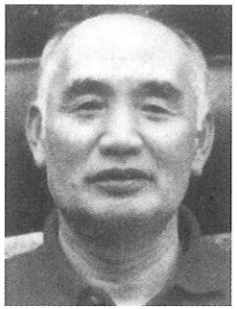
北風嘉己

このたびは歴史小説賞最優秀賞という名誉ある賞をいただき誠に光栄に存じます。私にとってこれは快挙であり、今後の創作に対する意欲をますます大きくさせてくれました。

受賞したこの作品は当初百枚ほどに仕上げたものでしたが、銀華文学賞の応募に際し、思い切って五十枚に縮小したものです。結果的にこれが評価されたことで自分の文章がいかに余分な贅肉がついていたかを思い知らされた次第でございます。以前どこかの小説募集のパンフレットに、切れ味いいか、ヒットするか！　のキャッチフレーズを目にしたことがありましたが、私はその意味が今はじめて分かったような気がしております。

文芸思潮にはこれまで、われら高年の者にも勇気と励ましを与えてくれる文芸誌として敬意を払って参りました。御礼とともに今後の発展を心から願うものであります。

ありがとうございました。



北風嘉己

きたかぜ　よしみ

1937　北海道札幌市に生まれる
56　札幌商高卒業
57　写真関連の商社に入社
96　定年退職
2004　第１回銀華文学賞奨励賞
「水色のセメントサイロ」

詩集
村地蔵へのレクイエム
和田利孝

第8回　銀華文学賞優秀賞

埋み火（うず）

土岐田　耕

平成八年の夏、時田耕介は、会社定年後の五年余をかけて執筆した大阪市の都市産業公害と行政史をテーマにした著作を上梓した。この年、幾つかあった講演依頼のうち耕介が引き受けたのは、設立は戦後だが大阪では名の知られたマネージメント研究会だけだった。著作をきちんと読んだ上で直接事務所を訪ねてきた会の幹事の姿勢に好感が持てたからである。

その日の午後、新大阪にある会場で耕介を迎えたのが佳苗で、「本日はご苦労様です。私は、この会の事務を担当しています棚橋佳苗（たなはしかなえ）と申します」と自己紹介をした。

耳に心地よいめりはりの効いた澄んだ声もそうだが、耕介は、素顔なのかと感じさせる艶やかな肌の白さをさらに引き立てる黒く濃い眉と長いまつげ、そして微笑みを浮かべた黒い瞳とに一瞬感じた強い既視感にもどかしさを感じながら佳苗の後にしたがった。

講演依頼のとき幹事が、「会員には上場会社役員のＯＢなど一家言ある人も多いので、失礼な意見や質問も出ると思いますが」と話していたように、会場に揃っていた三十人余のうち七、八名ほどは自分より年長と見えることに耕介は少し緊張したが、案内した佳苗がそのまま後ろの席に腰を下ろしたのを目にしたとき、不思議なことに緊張が消えた。

司会者の挨拶の間、それとなく参会者一人一人の顔を確かめていた耕介と佳苗の視線が合った。濃い眉とすっきりとした睫そしてまっすぐ自分を凝視める黒い瞳、「香子と同じじゃないか。香子に似ていたんだ」と思ったところで先ほどからの既視感のもどかしさが消えた。次の瞬間、懐かしさにかぶさる痛みが切り裂くように胸を疾り抜けた。

「今日の話は香子に聞かせるため、いや香子が聞いていると思って話そう」――それで、少し迷っていた話の出だしが決まった。司会者の紹介が終わって演壇に立った耕介は黒のマーカーペンで白板に「一所懸命」と書き、「今日の話のキーワードです」と言って会場を見回した視線で、それをメモする佳苗を捉えていた。

「司馬遼太郎さんは、日本人が創り出した唯一のイデオロギーは鎌倉武士が自ら開拓した土地に命を懸けた一所懸命であり、宗教を含めてそれ以外にはないと断じています。

鎌倉武士のこの一所懸命が、国土の大半を私有していた公家社会から自ら拓いた土地の私有を認める武家社会への革命を成就させたのだ。と司馬さんは指摘されたのです」

歴史的視点からみれば、それまで公家社会の象徴ともいうべき荘園の管理人に甘んじていた土豪の土地所有欲を煽って一大勢力にまとめた平将門の乱はその先駆けだったが、その失敗に学んだ土豪たちは、渇望する己が開拓地の所有権を得るには公家社会を圧倒する一所懸命集団の結束こそが必要だと考えた。この場合の最大の問題は、誰もが異存なく認め集団の力を最大限に発揮させるリーダーを誰にするかということである。

総論賛成各論反対は古今東西共通の人間社会の価値観である。男でも女でも各論では微妙にバラバラな「一所懸命」の人間集団の力を一つの方向に結集させるリーダーの重要性がここにある。この視点からすれば、鎌倉幕府の成立最大の要因は、一所懸命の土豪全員が一致して推挙できる源氏の棟梁源頼朝がいたからだ、となる。

耕介は、話をしている間ずっと、熱心にメモをとりながらその合間に自分に向ける佳苗の視線を意識していた。

以上のような前置きの後、耕介は、自分が都市産業公害問題に打ち込んだ発端が大阪市役所の公害部門職員の一人に真摯な「一所懸命」を感じたことによる、と話した。

「当時、この公害係は大阪市役所の『タコ部屋』と呼ばれていました。全国都市で最初に公害係を設置した市長が係長に指名したのが各部署で持て余されていたMさんでした。

タコ部屋と呼ばれたのは、市長から係員人選の権限を任されたMさんが選んだのも全員各部署の持て余し連中だったからです。結果的に、タコ部屋の全員が大阪市の公害対策を己の一所懸命の対象としたことが、世界の都市産業公害の象徴である「西淀川公害」を見事に解決し、さらに産業公害の終着駅たる『産業廃棄物』対策についても国をリードして、関東・中部の産業圏では未だ手付かずの『フェニックス計画』を成功に導いたのです」

大阪市長中馬馨がMを公害係長に選んだのは、港湾局に配属された入所一年目のMが、貧しい艀生活者の不就学児童たちのための特別学校の設置を当時の中井市長に直訴し実現したその「一所懸命」を、助役時代の中馬が記憶していたことによる。リーダーの要件は人を見抜く目である。組織の力はその一人一人の一所懸命を引き出したとき最大になる。

そんな話から入った講演への参加者の反応は上々で、話が終わったとき盛んな拍手を受けた。耕介はその中でも一番後ろの席で拍手している佳苗の唇が、声こそ出さぬが大きく「ブラボーッ！」と動くのに、この華やかな明るさは香子にはなかった、似ているのは濃い眉毛と真っすぐな瞳の黒さだけだったな、と思いながらも気持ちは充ち足りていた。

かつてないほど活発だったという質疑が終わったあと、司会者が立って「すでにご案内の通り、本日付けで結婚退社される棚橋佳苗さんの祝送会は予定通り五時半からですのでよろしくお願いします」と言った。盛大な拍手に少し頬を紅潮させ頭を下げている佳苗を見て、えっ、と思った耕介に、「時田先生、お差し支えなければご招待しますのでご出席願えませんか」と振ると会場から拍手が起きた。佳苗を見ると、是非という仕草で会釈したのに、このまま断るのは心残りの気もして出席を決めた。

講演出席者のほぼ全員が参加した祝送会で、一人一人がその親しさを競うような自分への賛辞を笑顔を絶やさず聞いている佳苗の明るさに、耕介はある種の感動を覚えながら、漸く固まりかけたカサブタを剥がしたように心を苛む香子への思いを持て余していた。

それでも、時田先生も一言と振られると、「一期一会と言いますが、今日初めてお会いした私が名残惜しい思いがするのですから、先程からの皆さんのお話をお聞きしながら、その名残惜しさのほどに心から同情しております」と場の雰囲気に合わせた話をして、会場を沸かせ盛んな拍手を浴びていた。このあと佳苗がお礼の挨拶に立った。

「残り僅か十日の滑り込みですが、『二十代で結婚します』との皆様への公約は果たすことができました。いや、できそうです」と笑顔で切り出したところで、一段と盛大な拍手と喝采がしばらく鳴り止まなかった。それでやや緊張したようだったが、佳苗は落ち着いた口調で会員それぞれへの甲乙ない謝辞を述べたあと、その日の耕介の講演にふれた。

「皆さんとお別れするこの日に、時田先生の一所懸命のお話を聞かせていただいたことに心から感謝しています。先生のお話をお聞きしながら、何事にも一生懸命、という私

の考え方の中に何事にも中途半端な自分への言い訳があったように思いました。

自分が今思いをかける一所とは何か、棚橋佳苗から桐之端佳苗と変わるだけではない、結婚という未知の世界でどう生きるのかについてのすばらしい贈り物を戴いたように思います。有り難うございました」

会が終わったあと十人近くに囲まれて二次会だという佳苗とは言葉を交わせなかったが、耕介への謝辞で終えた佳苗の挨拶は心に残った。「一期一会か」と独り言が口を突いた。

平成八年十一月十日、この日、耕介は六十五歳になって十日、佳苗は二十日あとに三十歳を迎える二十九歳だったから、毎年十一月の一カ月間だけは二人の年齢差は三十五歳ではなく三十六歳となる。

その二一日、耕介は、佳苗の結婚式にできれば全員祝電を、という司会者の依頼にしたがって式場宛てに祝電を打った。電文は「一癖も二癖もある数十人の熟年男性どもの心をトリコにして競わせながら、そのすべてに裏表ない自然体で応対してそんな男ども一人一人に貴女の結婚に心からなる祝意を述べさせたことの見事さは感嘆のほかなし。ご新郎とのこの上なく幸せな一所懸命の生活が目に見えるようです」と。

十二月に入ってすぐ、佳苗から事務所宛にお礼の手紙が届いた。

「時田先生の祝電が披露されたとき、式場が拍手と歓声でどよめきました。私はそれを見ながら、どうだ、これが皆さんの知らない私なんだぞ、と得意でした。あの日の先生の一所懸命のお話を決して忘れません。一期一会の大切さも大事にして、いつかもし、どこかでお会いすることがあっても、胸を張ってお話しできるよう精一杯生きてまいります。

先生のご本は紀伊国屋で買わせていただきました。これからじっくりと勉強させて戴きます。本当にありがとうございました」

佳苗の明るく幸せと自信に満ちた手紙が届いた日から、耕介は、心のうちでなんとか希薄になりかけていた香子への罪の意識を年が代わっても引きずり続けることになる。

耕介が都市産業公害史「大阪のタコ部屋」の者たちの一所懸命を見事に引き出した大阪市長のリーダーシップをテーマにしたノンフィクション執筆の意欲さえ消沈させた。

会社では衆目一致の重役候補と注目され妻と息子二人の家庭に何の不足もない耕介が、親しい友人の勤務先の社長秘書をしていた二十一歳の香子と恋に落ちたのは三十二歳のときで、終わったのは七年後、それも勤め先を退職した香子の方から身を引くかたちの別れだった。

十分未練を残しながら別れたその年に取締役へ昇進した当時の耕介は、その間のことを仕事もこなし家庭も壊さずに済ませたことを男の勲章だなどとわざと悪ぶって見せるなど、内心に消えることのない香子への未練とないまぜの罪の意識を押し隠していた。

それが、友人から退職した後の香子の消息を会社の誰も知らないと聞かされてからは、耕介は年ごとに、その間の、香子がすべてを明らかにして見せた男たちからの恋文やプロポーズそして社長やその知人から持ち込まれた縁談などのすべてを当然のごとく断らせた己のエゴで、香子の人生の選択の機会すべてを奪った罪の深さに苛まれるようになる。

佳苗と初めて会ったとき、香子がいる、とさえ錯覚した。その佳苗が万人の祝福する幸せな結婚を控えていると知らされたとき、今も消息さえ分からぬ香子とのあまりの落差の大きさに心の底の罪の意識のカサブタを引き剥がされるような痛みを感じた。耕介は、漱石の『三四郎』のヒロイン美禰子が三四郎を前にして呟くように口にした聖書の一節、「我が科（とが）は常に我が前に在り。我これを知る」を思い出していた。

耕介は一月いっぱい、取り掛かっていたことのすべてを中断して香子との七年を小説風に、しかし記憶にあるすべてをありのままに書き上げた。書きながら途中で何度も香子のために涙を流し、その都度自分の身勝手さと罪の深さに打ちのめされた。その罪の意識は香子だけでなく早くから感じていながらずっと黙って見守ってくれた妻にも向けられた。

書き終わったとき、耕介は、この表題を『罪（トガ）』として、「これは香子と自分だけのために書いた懺悔録ゆえ、二人以外の誰にも読ませぬ。香子とのことは一生消えぬ罪として背負っていくが後悔はしない。もし、もう一度生まれて同じように妻と出会えば結婚するし、そして同じ条件下で香子と会えば自分はまた同じ罪を犯すだろう。だから、生きているかぎり、香子への罪の意識は一日として忘れない」と己の心に誓った。

その年、平成九年七月二十日の土曜日は、晴れ渡ってはいたが風がさわやかな一日だった。阪急電車宝塚線の石橋の病院に入院していた友人への見舞を済ませて石橋駅西側の広い車道を駅側に渡った耕介は、誰かを呼ぶ女性のよく透る声を聞いた。

振り返った耕介は、薄いベージュの日傘と対の色のスカートが遠目にもすっきりした若い女性が立っているのを見て、自分には関係がない、と背を向けた。と、その背中を追いかけるようにさらによく透る声が、「ときたせんせーい！」と聞こえた。また振り返った耕介の目に、笑顔一杯

の桐之端姓になった佳苗が手を高く振っていた。

佳苗は出産した友人の見舞に来たと言った後、「すれ違ったのが先生だとわかって、思わず大声をあげてしまって。私はいつもこうなんで恥ずかしいです」と笑っていた。

十分ほどの立ち話で、耕介が問われるままに、公害史を書かせた市役所の持て余し連中に一所懸命の大仕事をさせた中馬市長のリーダーシップと、大阪の都市行政史をテーマに執筆にかかっている、と話したのに、佳苗が「是非私にもお手伝いさせてください」と言ったことから、以後耕介にとって佳苗は、妻に次ぐ第二の読者として初稿から最終稿までの校正を含めた無償の助手を果たしてくれることになる。

その年の十月下旬に送った二百枚ほどの初稿に感動したと校正稿を事務所に届けてくれた佳苗を、行きつけの割烹「いづみ」に誘ったのが二人で会った最初で、そこの四畳半の小部屋で食事をとりながら九時近くまで話した後、梅田の新阪急ホテル地下のラウンジで終電近くまで話し込むというのが、二人で会うときの恒例のパターンとなった。

終電近くまでというのは、当時二人が会うのは佳苗の夫が仕事の関係で遅くなる日と決まっていて、その日は終電一つ前の時間に夫婦で待ち合わせることにしていたからで、時田さんとお会いするのは主人には話しています、と何度目かのときに佳苗が言っていた。

二カ月に一度くらいのペースで会っていたその頃、佳苗が「時田さんとお話ししていて、父より年上の人と話していると思ったことは一度もないのと、あっと言う間に時間が経って、いつも話足りぬ気がするのが不思議で仕方がないのです」と言ったことがある。

耕介は、「それは多分、話しているときは二人とも好奇心一杯だった少年と少女の頃に帰っているからではないか。少年時代は、人生や恋愛など徹夜で話しても話足りないことが幾つもあった。佳苗さんと話している時は自分も少年に帰っているのだと思う。お互いの中にまだまだ残っている少年と少女の心が感応しあっているのかもしれない。五時間も六時間も話し続けて二人とも飽きないのだから」と話したことがある。

耕介の意見は佳苗の胸にストンと落ちたようだが、耕介の方はそれほど単純ではない。四畳半の小部屋で食卓を間にしているとはいえ、新婚のそれも女としての魅力と色香なら最高に匂い立つ佳苗と二人きりで三時間以上も過ごして何も感じないのなら、男ではない。

ましてや、当の佳苗は、耕介にとって罪の意識はそれとして、七年の長きにわたって男と女の情のかぎりを尽くし未練を心に刻み付けたまま去っていった香子と錯覚させた、そんな女が、寸尺の目の前でこれ以上はない信頼の瞳をきらきらさせ、取りようによってはまったく無防備で手を差

し出しさえすればそのまま崩れそうな姿態を曝しているのだ。

しかし、そこは男と女との経験を十分に積んできた男の知恵で、佳苗と会っているときの耕介は、佳苗を納得させた少年の心を持った三十五歳年上の男の軌道から自分を外すことはなかった。それだけに、その後は抑えていた男の欲望が吹き荒れた妄想の中では、香子との耽溺を重ねてすべてを剥ぎ取った佳苗の白い肌を紅色に染めるほど思うままに犯し尽くし、その果ての絶え入るような喘ぎ声を佳苗が許しを請うまであげさせていた。

誰にも読ませない、と心に決めて万が一の時に備えて封印・保管していた香子との一部始終を記述したそれを、佳苗に読ませたい、と考えたのはそんな妄想の中でのことである。妄想の中でしか在り得ないそのことを耕介に踏み切らせたのは、その二年後の平成十一年の秋、佳苗が夫の転勤で埼玉県の大宮市に引っ越すことが決まったときだった。

二人で会っているときの気分の良さは、まさに少年と少女とのやりとりながら、互いの間に時折ふっとよぎるなまめかしさの感じは男と女への好奇心が顔をのぞかせたかと思わせるものがあり、三年ほどの間に十数回も二人だけで過ごしてきた時間を佳苗がどのように考えかつ感じているのか、それを試すのは、転居によって二人で会うのが終わりになるかもしれぬこの機会を逃しては二度と来ない、と耕介が考えたのは男としての理に適う。

大宮市への転居を十日後に控えたその日、いづみからラウンジへと時間を過ごし、阪急電車梅田の改札口を入ったところで、耕介はさりげない口調で、「トルストイの『復活』になぞらえるのは傲慢のかぎりだが、小説のかたちで男としての自分の罪を赤裸々に告白したものがある。興味があるなら新居のほうに送るが、読んでみる?」と言ってみた。

佳苗は、一瞬のためらいもなく、「読みたいです。送ってください」と答えていた。

耕介が差し出した手を佳苗は手袋を外した手で軽く握った。二人が手を触れ合ったのはこのときが最初だった。耕介は、「最初で最後の握手になるかもしれぬ」と思っていた。

新居宛に『罪(トガ)』を送ったのは年が明けてすぐだが、一月が過ぎ二月の中旬を過ぎても佳苗から何の連絡もなかった。改めて『罪(トガ)』を読み返した耕介は、セックスの匂いなど一切感じさせぬ清潔感そのものの佳苗にとって自分と香子とのあまりにも赤裸々なセックスの描写は、これを自分に読ませた耕介への腹立ちというより以上に裏切られた気持ちなのかもしれぬ、と悔いるその一方で、「男と女はきれいごとでは済まぬ。これで切れる縁ならそれだけのことだ」と逆切れし開き直る思いもあった。

佳苗から電話がかかったのは三月に入ってからで、十日

頃に実家に帰るのでお会いできますか、と言う。淡々とした口調だったが、「いづみ」でいいかと聞くと、久しぶりにお話できるのを楽しみにしています。といつもの明るい口調なのに耕介はほっとしていた。

その日、佳苗は転居を機に英会話の勉強を再開したと話した後先に送ったノンフィクションの原稿に対する感想を熱心に話した。そんな話題に調子を合わせながら、『罪』のことが頭にある耕介は落ち着かなかった。佳苗がそのことにふれたのは、「いづみ」での時間が終わりかけた頃で、「お届けいただいた『罪』、読ませてもらいました」と、座り直した感じの佳苗が、耕介を見る視線が優しかった。

「香子さんは私とよく似ていると思います。二度読み返してみて、それがよく分かりました」、静かな口調で話し出した佳苗の言葉のほとんどすべてを、耕介は今でも覚えていて、それを思い出すたびに胸が熱くなる。佳苗はこのように言った。

「時田さんは、香子さんの青春を思うままに独占しながら自分が与えたのは理不尽な悲しみと苦しみだけだった。そんな罪の深さが許せない。とずっと思っていらっしゃる。

でも、女というのは時田さんが考えるほどか弱くはないのです。二一歳から七年もの間時田さんから離れなかったのは香子さんの選択です。それは、時田さんが香子さんの初恋の人だったからなどとは関係なく、時田さんのことを本当に愛していたからです。初恋の気迷いなど、まして相手が結婚できない人なら一年もしない間に醒めてしまうものです。

香子さんは、その間にも何人ものきちんとした男性からプロポーズされたのだから、時田さんと別れる機会はいくらもあったのです。そんな中で七年もの間二人の秘密を守り通し、そして最後は、恨み言などまったくないまま香子さんは黙って身を引かれたのです。

私が涙が止まらなかったのは、時田さんに電話で感情を抑えて淡々と別れを告げたあと、香子さんが呼び慣れた『耕介っ』と呼びかけ『元気でいてね。それと……、奥さんを大事にしてあげて……、さようなら』と言って、静かに受話器を置かれるところです。

あそこを読んで、香子さんは七年もの間ずっと時田さんの奥様に罪の意識を持っていたのだと思ったとき、ああっ、この物語の主人公は時田さんと香子さんのほかに登場場面は少ないけれど奥様がいるのだ、と感じたのです。この間三人は、それぞれお互いを傷つけ合いながら一方でお互いを愛し合い気遣い合っている、これは、時田さんが話をされた一所懸命に生きた三人の方が作り上げたすばらしい愛の物語なんだと胸が震えました。

私は今、香子さんはしっかり生きていると思っています。時田さんとの七年は、香子さんにとって生きている限り褪せることのない愛と幸せに満ちた青春の思い出なんですもの。

女にとって、愛した人から心から愛されたと信じられるくらい幸せなことはないのです。香子さんはそういう方です。ご自身で選んだ道を決して後悔しない人です。私には分かります。女の心のうちというのは男の方が考える以上に純粋でそしてしたたかなんです」

耕介を正面から凝視めながら話す佳苗の、その一つ一つの言葉が心に憑いたしこりを溶かすように沁みて、耕介は、香子が今佳苗の口を借りて『罪』を書いた自分に話しかけているように思えて、黙っていては自分自身の収拾がつかなくなるような気がした。

「佳苗さんが香子に見えてきたよ」と軽く言ったあと、「その佳苗さんの言葉に、僕は救われた気がしている。香子は、耕は自分だけがいい子ぶってておかしいよ、と笑っているのかもしれない。佳苗さんは『罪』を香子の気持ちになって読んでくれた。そんな感じがしている。思い切って読んでもらってよかった。本当によかった」

二人はこの日から、また月に最低一度は電話で話し、二、三カ月に一度は佳苗が実家に帰った時に会うようになったが、『罪』のことをお互いに話題にすることはなかった。しかし、その中で繰り返し描写した香子とのセックス描写のすべてを共有しているとの意識は、二人の間にそれまでとは微妙に違う緊張をもたらしていた。

耕介にとってそれは、清潔感に溢れて人生にも仕事にも純粋にそして一途に取り組んでセックスのことなど意識の片隅にもないはずと思っていた香子と、出会って一年もしない間に男と女の交情の深い淵に落ち込んでしまった記憶を生々しく蘇らせ、無垢な処女と人妻という違いはあるにしても、現実にいま、佳苗との間がそうはならぬままお互いにその緊張感を楽しんでいるのは、それなりの年の功と父娘以上の年の差にあるということかもしれぬ、などと思っていた。

その一方で、耕介は解けぬ疑問に悩まされていた。

子供を生んでいない佳苗は、三十歳を過ぎても化粧気を感じさせない白く肌理細かな肌は艶やかで、街を歩けば男どもの視線をひきつける一メートル六七センチの颯爽とした肢体はどう見ても二十代半ば以上には見えない。そんな佳苗が、なぜ格段のこともない俺のような男を選んだのか。香子のときもそうだったが、当時の俺はバリバリの三十二歳だったからまだ納得できる。男として解かねばならぬ謎だが、さて、と耕介は思っていたのだ。

年が変わった平成十三年七月、耕介と佳苗との縁の始まりとなったノンフィクションを上梓、全国紙にも取り上げられて八月に入ってすぐ重版した。それで、盆休み明けに二人でお祝いを、と言っていた佳苗から盆休み前になって、

急に決まった夫の一年間のパリ研修留学に同行することになりその準備に忙しくてお会いできなくなった、と電話があった。

気落ちはしたものの、新刊出版であれこれ追われていた耕介は、「淋しくなるが、お祝いは一年先の楽しみにとっておこう」と応じていた。その佳苗から、「明日大阪へ行きます。お会いできるでしょうか」と電話があったのは出発一週間前のことだった。

「来ちゃいました」、その日、耕介に会った佳苗の最初の言葉である。その時の、照れ隠しのしかし嬉しそうな佳苗が初めて見せた少女っぽい表情が、耕介に、初めて自分に身を任せたときの香子を思い出させた。お互いのそんな思いのせいか、その日は、「いづみ」の食事の間もいつもと勝手が違って二人とも取り留めない話に終始していた。

そんなことで落ち着かず、「いづみ」を出たのが八時過ぎといつもより早いなと思ったところで、「今日は、早く帰らなくてはいけないのか?」と聞いた自分に耕介はうろたえた。一瞬、えっ? という表情をした佳苗は、すぐ「いいえ、大丈夫です」と答えた。きっぱりした口調に佳苗の心のうちの緊張が伝わってきて、耕介の男の血を一気に波立たせた。

「あのとき俺は、その勢いで、夜の中之島公園を歩いてみようか、と口にしかけた。危なかった。止めてよかった。あの日、佳苗も自分を香子に重ねていたようで、それが、パリへの出発を控えた不安定な気持ちから自分の中の女を解き放ちたかったのではないか」

「今日の佳苗さんは、僕が今まで見てきた中で一番綺麗だという気がする。一番きれいな自分を写真に撮って、そのついでにパリ留学出発の記念に僕にも一枚もらえないかな」

冗談めかしたこの一言に、耕介は、自分と同じように佳苗の緊張がほっと解けるのを感じた。

「時日さんは人を乗せる名人です。はい、一番きれいな私をきれいに撮ってください」

いつもの笑顔に戻った佳苗に、耕介は、折角のチャンスをみすみす逃した自分の臆病さに地団駄を踏んでいた。駅の売店でインスタントカメラを買った耕介が、「何処で撮ろうか?」と聞くと、佳苗は「私はどこでもいいです。時田さんにお任せです」と言った。

佳苗のその口調に、耕介は、『三四郎』の中の、汽車の故障で旅館の同じ部屋で布団を並べた粋筋の女からのさりげない誘いに何もしなかった翌朝の別れ際、その女に、「あなたはよっぽど度胸のない方ですね」と笑われた三四郎のことを思い出していた。

佳苗の写真は新阪急ホテルの喫茶ルームの、近くに客の

いない奥の席に向かい合って座り、フラッシュを焚いて撮った。五枚ほど撮って終わろうとしたとき、佳苗は通りかかった店の女性を呼び止め、「シャッターをお願いできます?」と言って応じた彼女にカメラを渡すと、呆気にとられている耕介の隣の椅子にすっと腰を下ろすと肩を寄せてきた。

それも、一枚目は目を瞑ったかもしれないからと、今度はさらに寄り添うかたちで二枚目を撮らせた。

「時田さんは、本当に一番きれいな私を撮ってくださいました。時田さんと一緒のもきれいに撮れていて嬉しいです。この二枚は留学記念の新しいアルバムに貼る事にしました」

これは、この時の写真を同封した佳苗の、パリからの最初の手紙に書かれていた。

一人で撮った佳苗も二人で撮った佳苗も、共に彼女の人生で最高に美しい時を撮ったと耕介は思っている。この二枚の写真を見た妻は、「美人だという女の人の写真で美人だと思える人は少ないけど、パパの言っていたとおり本当にきれいな人だね」と言っていた。

美女の心を得ることこそ男の勲章というのなら、誰の目から見てもごく自然に佳苗が自分に寄り添ってくれているこの写真は間違いなく、男の勲章、だと耕介は思っている。

書きをれば恋の文めく夜長かな

これは耕介がパリの佳苗に手紙を書き終わったとき詠んだ句である。佳苗がパリに居る一年の間に二人の間で往復したエアメールは二十四通で月に二回の往復となっていた。

「人間にとって『年に逆らえない』ことは、女性が子供を生めるか生めないか、ということ唯一つでそれ以外にはない」

これは平成十八年七月二二日の土曜日、大宮市から京都の実家に帰っていた佳苗と会ったときに耕介が言ったことで、このとき耕介は七四歳、佳苗は三九歳だった。

この日、耕介が時折冗談交じりに話していた子作りについて初めてきびしい調子で佳苗に言ったのは、それまで夕方からと決まっていた二人の会う時間を、今日中に大宮へ帰らなければいけないので昼間にと言った佳苗のその口調に、二人で会うのはこれが最後になるな、と耕介が感じていたからだ。

「パリ出発の前に会ったとき、パリから帰ったら子供のことを真剣に考えます。と佳苗さんは言ったが、あれからもうすぐ四年になる。自分の意思で子供を作らないというのなら、それも一つの生き方だから第三者がとやかく言うことではない。

ただ、今から話すことは佳苗さんにいつか言っておきたいと思っていたことだ」

いつもとは違う耕介の姿勢に佳苗は座り直すかたちで真っすぐ耕介の目を見て頷いた。耕介がその日佳苗に説いたキーワードは「絶対孤独」で、そのことをきちんと理解した上でそんな状態に耐える覚悟はあるか、ということだった。

佳苗さんがこのまま年を重ねるとして自然の摂理に従えば、この世を去るのはご両親と兄さんと姉さんそして年上のご主人の順となり、気が付けば佳苗さんの周囲には頼るべき身内が一人もいなくなる。それが絶対孤独の状態だと解釈すればいい。

佳苗さんが、そんな境遇の四十年後の自分を想像してみてもなお子供は作らない、というのならそれでよい。もし、はっきりと想像できない絶対孤独の状態を体験してみたいと思うのなら、ご主人と信濃の善光寺に行き二人で手をつないで胎内巡りをしてみることだ。

一ミリ先も見えずただの一ミリも空気が動かず完璧な無音のそこでは、自分が真っすぐ立っているのかさえわからない。そんな心細さの中にいると、つないでいるご主人と佳苗さんの手とがお互いにとってどれほど心強く頼りになるものかがわかってくるはずだ。

どれほどの時間だったのか、耕介が話している間ずっと耕介に向けられた佳苗の視線は話し終わってもしばらくそのままだった。耕介はその間、何度か佳苗の唇が動きかけたのを見たのだが、やがて視線を落とした佳苗の口から洩れたのはかすかなため息だけだった。

沈黙の中で時間だけが過ぎたが耕介は黙っていた。そんな頭の中で、目の前の佳苗と別れが近付いたころの香子とがダブって見えた。あのとき俺は若かった。その沈黙が我慢できずにその苛立ちを口にして香子を追い詰めていた。その関わりのかたちはまったく違うが、その沈黙の中に様々な葛藤が渦巻いている点では二人とも同じだと思っていた。

香子への罪の意識が突き上げてくるのに、耕介はぐっと下腹に力を入れた。と、俯いていた佳苗が顔を上げ耕介を見て口を開いた。

「時田さんがご心配下さったこと、有り難いと思っています。よく考えてみます」

いつもの明るい笑顔にはほど遠かったが、その表情には何かふっ切れたようなほほ笑みが浮かんでいた。それから後何を話したのかについての記憶はない。

「私の手作りです。よろしかったら、時田さんの事務所に飾ってください」

別れ際に渡されたのは、小ぶりなガラスケースに収められた緋鯉と真鯉が対となった絹の縫いぐるみだった。二人

で会うのは今日で終わりとの俺の感は当たっていた、と耕介は思った。

正月の休み明け、事務所に届いた佳苗の年賀状を見て、耕介は、年齢差三五歳の男と女とがただ会って話をするだけの交際を十年も続けたのは異例のことで、その行き着く先が年賀状だけの付き合いになるのは自然な落ち着き先だ、と自分を納得させていた。

「今病院から帰ってきました。赤ちゃんができました。予定は七月です」

佳苗から、「ご無沙汰しています。桐乃端佳苗です。お元気ですか」という、いつもの決まり文句なしの、いきなり弾んだ声の電話が掛かったのは二月に入ってすぐだった。

年賀状だけの付き合い、と自分を納得させたそんな心のどこかで、何とも侘しいこの結果は、これが最後だというならと、男の意馬心猿を抑えてそれこそ父親代わりのきびしさで子供を作れと強く勧めたことが佳苗を怒らせたのではないか、との未練な思いも持て余してもいたのだ。それだけに、「赤ちゃんができました」という佳苗の弾んだ声は耕介のそんな未練な思いもうら寂しさも一気に吹っ飛ばしてくれた。

何よりも、そのことを身内を除けば誰よりもまず最初に自分に知らせたと思わせる、佳苗の、「今病院から帰ってきました」が、強がりながらもこの十年ずっと心魅かれていた女に去られた、と意気消沈しかけていた耕介の中の男を奮い立たせた。

復活した佳苗からの電話で、結婚前に受診した産婦人科の医師から女性特有の持病を指摘されて妊娠を避けていたのだが耕介の意見を聞いた後、夫婦で話し合い医師にも相談して子供を作ることにした。幸い経過は順調で担当の医師からは大丈夫だと言ってもらっている。迷っていた背中を押していただき本当に感謝しています、と言ってくれた。

耕介はそれと聞いて、無事に生まれてくれなければ自分にも責任がある、と出産予定が近付くにつれて何とも落ち着かぬ気持ちになっていた。七月に入ってまもなく佳苗からの電話で、予定より早く六月末に無事出産、「生まれたのは女の子で私の一字を取って佳歩と名付けました」と聞かされたとき、耕介は肩の荷を降ろした気分になったものだ。

青桐やみどり子の名は佳歩といふ

耕介は友人の書家に色紙に書いてもらったこの句を出産祝いに添えて贈った。折り返して、額装したその色紙を背景に赤子を胸に抱いた佳苗の写真が送られてきた。そこには、「女性が人生で最も美しいのは幸せな結婚をして初め

て母親になったとき」とする耕介の持論そのままに、そこには母としての自信と幸せに満ち溢れた佳苗が、カメラ目線そのままの誇らしげな視線を耕介の視線にひたと合わせて立っていた。

耕介はそのとき、七十五歳の自分の中の男が、かつてふくよかで端麗なその容姿で多くの男たちを魅きつけていたこの女を今独占しているような高ぶりを感じていた。

しかし、そんな高ぶりなど男のとんだ錯覚であり、初めてのわが子が生きがいとなった女の心にかすりもしないもので、耕介が「かなえさんは女から母になった」と日記に書いたのは、佳苗からかかった電話の話題が子育てに終始したお盆過ぎのことだった。

「年に逆らえないな」とごく自然に思った自分へのショックから、同じ言葉から絶対孤独などと大仰なことを持ち出して子供を作れと佳苗に迫ったこと、「背中を押してくれたのは時田さん」と言ってくれたことを思い出しながら、耕介は、あの二つのことは、佳苗との間に結果的には何もなかったものの、あの不可思議な十年の間二人の間に流れていた年齢差を超えた男と女としての緊張感を抜きにしてはなかったことだと考えていた。

絶対孤独の恐怖などを持ち出して子供を作れと迫るなど、男と女の緊張感を共有した者同士でなければ在り得ることではなかっただろう。佳苗は、俺のその言葉を真剣かつ本心で受け止めたからこそ己の命を懸けて妊娠に挑みそして佳歩ちゃんを生んだ。

耕介にとってずっと解けない謎は、知性美に匂うような色香を添えて何十人もの熟年男を魅了した果てに幸せな結婚を祝福された人妻でありながら、佳苗は、何ゆえに三十五歳も年上の格別のこともない男を選び自ら進んで十年もの付き合いを続けたのか、という事だ。

その交流は、結婚二年目に夫の転勤で長岡京市から大宮市に転居したときも、夫の研修留学でパリで住んだ一年間も、そして帰国後もずっと続いた。耕介はこれは男の常ということとは別の意味で、二人で会い始めた当初から佳苗に対して男として女を感じていた。

それを表に出さずにいたのは年齢差からくる大人の知恵で、佳苗とのことはすべて受け身で通すことにしたことによる。だが、古希を越えた男の知恵はそれほど単純ではない。二人の間に微妙な緊張感が漂い始めたのは、耕介がさりげなく佳苗のうちの女に対して男としてのメッセージ『罪』を届けてからである。

このメッセージを届けた時、耕介は、会うたびごとにいや増す匂うような色香で男の心をそそっていながら、それまでと何一つ変わらぬ好奇心一杯の明るさとさわやかさのほかは女の心の揺らぎなど一切窺わせぬ佳苗に対する男の性の苛立ちともどかしさから、これで縁が切れてもいいと

思っていたのだ。

結果的にはそれで縁が続いただけではなく、それから後は、会って話して別れるというかたちは何も変わらぬのに、二人の間には暗黙のうちに会うことそれ自体を密かごととして共有する雰囲気が生まれたのは確かなことだった、と思っている。

夜の出会いを昼にと電話してきたあの日、耕介はすぐ、佳苗はこの密かごとを終わりにしたいのだと思い、いい潮時だとも思った。二人のその思いきりが縁で子どもが生まれて、七年続いた男と女の密かごとは密かごとのままで幕を引いた。

「幕を引いた?、そうかな……」

そんな独り言に耕介は、「そうだよな」と呟いていた。佳苗が、近づいてきた多くの男たちではなく自分を選んだ謎、二つの思いを込めたメッセージのもう一つの答えも聞いていないぞなど思いが至ったとき、緋鯉と真鯉の縫いぐるみが頭に浮かんだ。

「アンコールが残っている」、思わず口を突いた独り言に応えるかのように、目の前の電話が鳴った。耕介はふっと浮かんだある予感に確信を持って受話器を取った。

「ご無沙汰しています。桐乃端佳苗です。お元気ですか?」

一年以上も間が空いていたはずなのに、つい昨日の続きのように明るく笑いを含んだ佳苗の電話の始めの、いつもの決め台詞に、耕介もいつもの調子で「佳歩ちゃんも元気?幾つになったのかな」などと応じていた。

佳苗の電話は、年末の忙しいときで無理かと思ったのだが夫の急な出張で長岡京市の実家に帰ることにしたので明日か明後日のいずれでも耕介の都合のいい時にお会いしたい、ということだった。明後日の夕方でもいいか、と口にしたとき耕介は少し緊張した。それは、先程頭に浮かんだ二つの疑問をこの機会に佳苗に問いたいと思ったからだ。

「私は大丈夫です。実家の両親は佳歩にメロメロですから私がいない方がうれしいみたいです」という佳苗に、「じゃ、『いづみ』に予約を入れておく」と言って電話を切った。その途端に、耕介は、久しく忘れていた男の血の騒ぎに身体を熱くしていた。

平成二十二年十二月十日、佳苗は待ち合わせた新阪急ホテルのロビーに約束した五時半きっかりに現れた。黒のコートに黒のブーツそして深紅のスカーフという鮮やかな対比で足早に入ってきた佳苗は、耕介が、ロビーのざわめきが一瞬止まったとさえ感じたほどに人目を引いた。そこには、その間の歳月の流れなど微塵も伺わせぬ、さらなる清潔な色香を漂わせ自信に満ちてさらに美しくなった佳苗がいた。

割烹いづみの四畳半の小部屋で久しぶりに向かい合った

とき、二人はその日初めてのように顔を見合わせた。笑みを浮かべて互いに見つめ合ったとき四年五カ月の時が消えた。

「ロビーに入ってきた佳苗さんを見たとき、一番きれいだと思ったパリに発った時よりきれいになったと思ったくらいだ。それで四十三歳だなんてね。アラサーで十分通用する」

一瞬、耕介をにらんだ佳苗の瞳が笑みくずれた。

「時田さんにそう言っていただけるなんて、ほんと、最高に嬉しいです。でも、時田さんも少しも変わらず若々しいなと、わたし感動しました。以前、時田さんが、会っている時の二人は年の差を超えて少年と少女に帰っている、と話されたことを思い出しました」

耕介は、頬から顎そして首筋にかけてもさらに豊かな胸の膨らみも少しのくずれも感じさせないその佳苗の笑顔を本当に少女のようだと思いながら、今日は少年と少女では困る、と心の内で独りごちていた。

食事の間の話題はもっぱら三歳半になった佳苗の娘佳歩のことで、その日常を話す佳苗の生き生きとした表情を、耕介はその間の子育てに母親としての自信に満ちた女ならではの色香と美しさがあるな、と感心しながら見ていた。

耕介が今回話そうと考えていたことを切り出したのは、食後の果物が出た後だった。

「今日は、昔風にいえば八十歳の男でなければ言いにくいことを佳苗さんに聞きたい。パリに発つとき聞きたかったことだが、六十代ではまだ早いと思って止めたんだ」

と、一瞬口ごもった耕介の目を佳苗はじっと見て、ふっと頬を緩めた。

「そういう話をするときの時田さんはほんとに少年のようで私は好きです。時田さんが聞きたいことなら何でも聞いてください。お答えします」とはっきり言った。そこには、娘のことを話す母ではなく、耕介の聞きたいことが何なのかを知っている女の表情があった。

「聞きたいことは二つ。一つは香子との男と女の関係を赤裸々に描写した『罪』を読ませた僕の意図をどのように受け止めたのかということ、もう一つは、そんな男とこんなかたちでずっと付き合ってくれたのはなぜかということだ。佳苗さんのおかげで香子への罪の意識からは何とか救われたような気がする。

僕は、初めて会ったときから男として香子に重ねてきた佳苗さんが、それぞれについてどのように考えていたのかを知らずにあの世に行くのが心残りということだ」

話している間二人の視線は絡んだままだったが、話しはじめてすぐ、佳苗のその瞳が自分を誘い込むような潤みをみせたことに気づいた。その唇を吸いたい、白く豊かな乳房を揉みしだきたい、耕介は、今なら、そのすべてが許されると思いながらも淡々と話し続けた。

話し終わったとき、佳苗は、ほーっと吐息をついてそれから、失礼します、と言ってトイレに立った。席に戻った佳苗を見て、耕介は、口紅を引き直してきたのがわかった。

「『罪』を戴いて後半まで読み進んだとき、『俺は男なんだぞーっ！』という時田さんの声が聞こえた気がしました。だから、私も負けずに『私は女なんだぞーっ！』と一人で叫んでいました。これが私の答えです。これでいいでしょうか？」

佳苗のその答えに自分がどのように反応したのか、その後話したことのすべてをその日は早めの九時過ぎ、駅の改札口に入った脇のやや人目の死角になる暗がりですっと身を寄せた佳苗が、耳元で囁くように言った言葉が耕介の記憶から消え去ってしまった。

耳たぶに感じたその一つ一つの言葉に乗せた佳苗の息の熱さは覚えているというのに、だ。

「こちらへ来る前に、『罪』を読んできました。読み返していつも胸が熱くなるのは、鳥羽の宿で『二人の初夜だもの、もう時田さんとは呼びたくない。どう呼んだらいい？』と香子さんが問いかけ、耕、と決めるところです。私が、時田さん、ではなくて自分の思いに添う呼び名に代えたのは、パリに立つ前にお会いした日からです」

えっ、これは佳苗から俺への愛の告白なのか？、と混乱した耕介からつっと身体を離して向かい合った佳苗は耕介の右手を両手の掌で強く包み込んだ。初めて見せる佳苗の大胆さに熱くなっていた耕介の右手にその冷たさが沁み通ってきた。まだ戸惑いの中にいる耕介を、佳苗は少し笑いを含んだ悪戯っぽい瞳で真っすぐに凝視め、こう言った。

「香子さんはご自分のことを、大変な嫉妬焼きだと言われています。私も、『罪』で描かれた香子さんの心の内を思いやって何度も涙を流していながら、その一方で私の中には、そんな香子さんに強く嫉妬している自分がいるのです。

二人の女性にそんな思いをさせていながら、当のご本人が何にもなしでは不公平な気がしてきました。だから、今日のご質問へのお答えはここまでにしておきます。

ですから、少年の心のまま、まだまだずっとずっと元気でいてくださいね」

耕介は、この後自分が佳苗の言葉に何と応じたのかやはり覚えていない。しかし、この時はまだ、颯爽と人込みに消えていく深紅のスカーフと黒いコートの内側に、貴方が男なら私も女なんだぞーっ！、と叫んだ女がいる、という思いに満たされていた。

その夜、耕介は、佳苗が『罪』の中で強く香子に嫉妬したと話した鳥羽の宿の箇所を読み返してみた。〝耕〟と呼ぶことに決めた香子が初めて、耕、と呼び、「まだ少し怖

いから、やさしくしてね」に始まる、二人の初めての性の交わりの一部始終を読みながら、男と女のこんな生々しい描写の一つ一つを、佳苗はいったいどんな思いで何度も読み返したと言ったのか、と想うほどに七十八歳の男の血がたぎるように騒ぎ立った。

読み終えた耕介は、この箇所を読ませるよう巧みに誘導しここまで俺の男を挑発しておきながら、もし、二人で会うのがこれっきりというのなら、別れたあと一切の消息を絶ったままの香子と同じじゃないか。男の中の埋み火に思いっきり空気を吹き込んでおいて、そりゃないだろうが……。いや、待てよ……、もし、あそこまで口にした私が、次にお会いしたいと電話をしたときの覚悟はいいですか?、という意味だったとしたらどうだ。

「それはない。次はもうない」、思わず口をついた独り言に耕介が驚いていた。「時田さんが男なら私は女です」、五十代までの俺ならあれを聞いたその瞬間に佳苗を抱き締めていた。なのに、七十八歳の俺は予期しなかった答えにただうろたえていた。佳苗の中の女に恥をかかせた男の無様さ、スタンドの明かりが耕介には身もだえするほど眩しかった。

スイッチを切った右手に、両手で包み込んだ佳苗の掌の冷たさが生々しく蘇ってきた。「火のように冷たい」脈絡もない言葉が胸に突き刺さる。あの掌の冷たさは女の心の火の熱さだった。『罪』を読ませたことで俺は、佳苗の女の芯に火を点けた。

悪戯っぽく光った佳苗のあの瞳は、「自分が火を点けた女の心を、それこそ女性経験豊富な三十五歳年上の男として何もかも承知していながら、素知らぬ顔で思うままに弄び己一人が散々に楽しんだあげくの果てに、それでも飽き足らず、その火に灼かれている女の心の内まで口にさせて知り尽くそうとするのですか?」という怨嗟の瞳だったのではないか。

「私は女なんだぞーっ」が、「火を点けたのは耕介、あなたなんだぞ」なら、「ずっと少年の心のままでいてくださいね」は、粋筋の女が三四郎に言ったと同じ、「耕介、あなたはよっぽど度胸のない方ですね」ということになる。

パリに立つ前、「来ちゃいました」と言った佳苗は女として男の俺に会いに来た。あの日から俺の呼び名を変えたと言った。香子が耕なら、佳苗に残されている呼び名は呼び捨ての、それも、「度胸なしの耕介ーっ!」以外にはない。

暗闇に慣れ目を開いたまま耕介は大きく息を吐いた。F「女の私にここまで言わせて」ビ・サイレント!、確か山口百恵の歌だったなと思った瞬間、紅を引き直した鮮やかな唇と真っすぐ自分を凝視めた黒光りする瞳とが重なって耕介の男の芯を熱く揺さぶった。

受賞の言葉

土岐田　耕

私は「一所懸命」という言葉が好きです。だから、「一所懸命」の人も好きです。その中でも、一つ事に「一所懸命」を貫く人には格別に心を動かされます。

私が、一所懸命に括弧付けするのは、人間をそこに駆り立てる必要条件は挫折体験であり十分条件は自分の頭で考える・変節しない、だと考えているからです。中学一年で敗戦を迎えた私は、大人たちの価値観が一夜で激変した様子を脳裡に焼き付けているのです。

会社退任後の十年を打ち込んだ別掲の拙著は、小説で紹介した一つ事に「一所懸命」の人との出会いが機縁であり、著作が縁で依頼された講演のキーワード「一所懸命」がこの小説執筆のキーとなりました。必要・十分条件は満たしてはいるのですが「一所懸命」の対象が十年ごとに変わる多情な七九歳の男が書いた恋愛小説の入賞が、後期高齢者各位のまだまだ間に合う「一所懸命」に火を点けてくれれば「以て瞑すべし」であります。

土岐田　耕

ときた　こう

1932　香川県小豆島に生まれる
51　香川県立小豆島高等学校卒業
56　和歌山大学経済学部卒業
91　会社退任後、黒田事務所開設
　　主業務、著述・講演

主著

『大阪都市産業公害外史』(96) 行政編・公害編・産廃編—三部作、同友館

『月の石』(01) —都市復権にかけた中馬馨命の軌跡　上・下巻、同友館

『遍路の島の地の塩』(06) —黒田一族私史、印刷製本：クボタエイトサービス